



西遊補訳注（第九回～第十二回）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004352

西遊補訳注（第九回～第十二回）

大 平 桂 一

大阪府立大学人文学会 人文学論集 抜刷
第32集（2014年3月）

西遊補訳注（第九回～第十二回）

大 平 桂 一

第九回

秦檜は百身も自ら贖い難く

大聖は一心に穆王に皈す

帳簿管理の判官が善行悪行を記録した帳簿を奉呈し、御覧に入れた。

悟空は見終えると、すぐに大声で、

「判官、どうして帳簿に秦檜の名前が無い！」

「殿下、秦檜は極悪非道、その他大勢の亡者たちの中に紛れ込ませることは小判^{わたくし}とてもできません、やつの罪業を別に一冊の文書にし、帳簿の一番下にはさみました」

悟空は言葉通り秦檜の罪業の記録一冊をめぐって、頭から見ていった、
會ま金主呉乞買¹が檜を其の弟撻懶²に賜う。撻懶山陽を攻め、檜は遂りて首て和議を建てたり。撻懶これを縦ちて歸らしめ、遂りて王氏と俱に帰る³。

[偶然金の君主呉乞買が秦檜を弟の撻懶に賜った。撻懶が山陽を攻めた時、秦檜が初めて和議を提案した。撻懶は彼を解き放ち、宋に帰らせた。そこで妻の王氏とともに帰還した。]

悟空が言う、

「秦檜、おまえは臣下として、その身を捧げて名を揚げようともせず、金国に内通するとは、いったいなぜだ？」

「それは金の人間が描いた絵空事、檜とはまったく関係がありません」

-
- 1 金朝の第二代皇帝太宗。本名は呉乞買。兄の太祖阿骨打の後をうけて帝位に即き、まず遼を滅ぼし、ついで宋に侵攻して徽宗・欽宗の二帝を俘虜にした。
 - 2 太宗の従弟で重臣完顔昌。撻懶は本名。太祖や粘罕に従って遼を征討、後に六部路都統となって宋に侵攻した。宋との国境策定交渉を行った。
 - 3 この部分『宋史』卷四百七十三秦檜傳〔以下「秦檜傳」と略す〕では、「會金主呉乞買以檜賜其弟撻懶爲任用、撻懶攻山陽、建炎四年十月甲辰、檜與妻王氏及婢僕一家、自軍中取漣水軍水砦航海歸行在。」となっている。

奇抜。悟空はさんのかおにひかるは銀面玉牙わるものさがしのみずかみの判使に求姦水鑑を持って来させた。鏡の中には秦檜が金の国主を拝し、万歳を唱えるのがはっきりと映っていた。金の国主が何か耳打ちすると、檜は頷き、檜からも耳打ち、金の国主は微笑んだ。出発際に金の国主がまた耳打ち、檜は「もちろんです、もちろんです」と答えた。

悟空は頭にきて、「秦檜、貴様は鏡の中の秦檜を見たか？」

「殿下、鏡の中の秦檜は鏡の外の檜がいかに苦しんでいるかを知りません」

悟空は、「今こそやつも苦しみを思い知るぞ、急げ」と、鉄面鬼せんしんいばらに通身荆棘の刑⁴を命じた。百五十名の鉄面鬼がただちにハハッとして応答、六百万本の縫い針を取り出し、秦檜の全身を刺しまくったのだった。

悟空はさらに読み進んでいく。

紹興元年、参知政事⁵をさず除けらる⁶。檜は禍しき心まがまがを包み藏し⁷、唯

4 冥府に於ける秦檜裁判は、明刊本『大宋中興演義』（古本小説叢刊第三十七輯所収、以下『演義』と略称）に起源を持つ。『演義』では錦城の正義漢の書生胡廸が閻羅王に招かれて冥府に行き、そこで拷問される秦檜・万俟卨・妻王氏を見る。秦檜は銅柱に縛り付けられ刀に串刺しにされ、雷撃で粉々にされ、一旦は「黒風」に吹かれてもとの姿にもどる。次にベッドに縛り付けられ、飛びまわる戈によって身体を碎かれ、火の車に乗せられてグルグル廻され燃やされ尽くし、またもや「水酒」でもともどる。続いて長矛で貫かれて氷の池へ叩き込まれ、滅多切りにされ、引き上げられて銅柱に釘付けにされ、煮えたぎる油をかけられる。腹が減っては鉄丸を喰わされ、喉が渇くと銅汁を飲まされる。胡廸はこのような光景を目撃した後、秦檜の判決文を書かされ、それを見た閻羅王は大喜び、胡廸の寿命を伸ばすことを約束し、この世に帰還する。これを意識して書かれたのが『西遊補』であるが、秦檜に対する拷問ははるかに多様に、ファンタジックになり、秦檜の供述が即座に拷問に反映されるといった言語遊戯の要素が新たに付け加えられている。また秦檜は国家の大罪人ということでただの死刑ではあきらまず、磔刑三十六回、斬刑三十二回という判決を言い渡され、輪廻転生して犯罪をくりかえし、死刑にされ続けるといふ民間伝説があったらしい。時代は後になるが、清の景星杓の『山齋客譚』（『昭代叢書』所収本）に次のような記事がある。「嚴灝亭先生の曾孫曉蒼、江干の一寺に讀書す。鄰の一嫗鬼の憑く所と爲る。曰く、吾輩は冥道の押使なり。秦檜の魂を監して鄴都に赴く。途に此を經るに、媼何を以て穢水を以て吾が衣を澆すやと。其の家祈請すること再三にして始めて甦る。初め其の秦を押する故を問うに曰く、檜の今の後身は金華の一婦爲り。夫を謀るが爲に磔を犯し、今決し畢りて押還するなり。又宋は今より距たること已に久しきに、何を以て始めて罪を正すやと問うに、曰く、檜賊は擅に和議を主し忠良を屠戮す。天曹磔三十六、斬刑三十二を判決するに、正に未だ已らざるなり。」西遊補と同工異曲の妙がある。なお『山齋客譚』の記事は芥川龍之介の『江南遊記』の岳飛廟の条にも引かれている。

5 参知政事は宰相に次ぐ副総理格。『澠水燕談錄』卷五に、「國初、趙樸宰相爲り、朝廷は薛居正呂餘慶を用いて政事を共にせしめんと欲するも、樸と齊しからしむるを欲せず、其の名號に難る。詔して問うに、陶穀曰く、唐に参知政事知樞務有り、宰相に下ること一等等。故に以て居正等に参知政事を命ずるも、押班せず、知班せず」とある。有名人の中では范仲淹・歐陽修・王安石らがこの地位に在った。

だ宰相の身てに到はいるを待つ。

[紹興元年、參知政事に任命された。檜はたくらみを包み隠し、ひたすら宰相の位が手に入るのを待った。]

悟空は天を仰いで高笑い、「宰相が身てに到はいるだと!? それを待ってどうしようってんだ?」

高総判が申し上げた、

「殿下、今天下には二種類の宰相候補があります。一種ひとては飯を喰らい粋な服を着、妻といちゃつき、子供を猫かわいがりする最低男。こいつは宰相の地位が手に入るなら、自分を美々しく飾りたて⁸、故郷に錦を飾り、人を奴隷扱いし、人をペテンにかけてやろうと狙っております。

もう一種ひとては平天冠・白玉璽てんしのいんを備えて、国家を売りに出し、朝廷を傾けてしまう輩です。こいつは宰相が手に入るのを待って、政治権力を独占し、天子を制御し、賞罰を専断しようと狙っております。秦檜は後の一種です」

悟空はそこで小鬼卒に平手打ちを喰らわせることにした。赤心赤髮鬼の一团がどっと秦檜を取り囲み、巳の時から平手打ちを始め、未の時になってもまだ止めようとしない。悟空は大声で、

「赤心鬼よ、そこまでしなくていい。後でちゃんとぶちのめせるから」

さらに読み続ける。

八月、右僕射を拜す。九月、呂頤浩⁹が再び相となり、檜は同に政を乗る。檜は其の党を風し、内修外攘を建言せしめ、頤浩を鎮江に出す。上は嘗て直学士綦密禮¹⁰に謂いて曰く、檜は河北の人を以て金に還し、中原の人を劉豫¹¹に還さしめんと欲す。若し兩人は南

6 この部分秦檜傳では「紹興元年二月、除參知政事。」となっている。

7 「包藏禍心」の用例としては、『三國志』卷九曹爽伝の「爽は支属を以て世よ殊寵を蒙り、親しく先帝の手を握りての遺詔を受け、託するに天下を以てす。しかるに禍心を包藏して、顧命を蔑棄す」がある。

8 「自分を美々しく飾りたて」の原文は「華藻自身」。『文選』卷三十四曹植「七啓」に、「歩光の劍、華藻繁縟たり」とあり、李善の注は「藻は文采なり」と解している。ここでは他動詞として使われている。

9 北宋哲宗紹聖年間の進士。南宋高宗期の宰相で、秦檜と対立し、中原奪回をめざした主戦派。

10 北宋徽宗政和八年進士。高宗朝の翰林学士。紹興知府の任にあった時、対金防衛戦で活躍した。

11 北宋哲宗の元符年間の進士。高宗朝に済南知府となったが、金に降伏、「大齊」という傀儡政権の「皇帝」となった。後に宋軍に敗れ、退位させられた。

に歸し、北人は北に歸せば、朕は北人、將に安くに歸せんとするや¹²。

[八月、右僕射に任命された。九月呂頤浩が再び宰相となり、秦檜はともに政權を担当した。秦檜はその手下を唆して、内政外政の分離を献策させ、呂頤浩を鎮江に出した。帝はある時直學士綦密禮にこう言った、「秦檜は黄河以北の人間を金に帰属させ、中原の人間を劉豫に帰属させようとしている。もしも南の人間が南に帰属し、北の人間が北に帰属したら、朕は北の人間だから、いったいどちらに帰属すればいいのか]

悟空が言った、

「宋の皇帝はやはり本音を言ってるんだ。このご時勢、在野の処士でも今日は檄文¹³、明日は官報に接すれば、誰でも青肝碧血の心を抱くようになる。おまえの公爵の位三つ¹⁴、万石侯¹⁵は誰のだ？五色の印綬、六柳門は誰のだ？千丈院、百銷錦は誰のだ？いずれも『龍津雜記』¹⁶に見える。

かみは国恩に報いようとせず、ひたすら姦毒を内に秘め、九重の宮殿に住む天子が一尺の棟梁さえ保てなくさせる。これでもお前は忠臣か、それとも姦臣か？」

「檜は愚劣とは言え、本来は君主を守り、皇室を安んずる心を持っておりました。「南人は南に歸し、北人は北に歸す」というのはほんの座興でして。閣下本気になさらないように」

悟空は、「これは座興じゃないぞ、小刀山¹⁷を担いで来い」と叫んだ。

ザンバラ髪の獠猛な鬼卒が二人、小刀山を担ぎ出し、秦檜を引きずり

12 この部分は秦檜傳では「八月、拜右僕射、同中書門下平章事兼知樞密院事。九月、呂頤浩再相、檜同秉政、謀奪其柄、風其黨建言、周宣王内修外攘、故能中興、今二相宜分任内外。頤浩遂建都督府於鎮江。帝曰、頤浩專治軍旅、檜專理庶務、如種蠱之分職可也。二年…前一日、召直學士院綦密禮入對、示以檜所陳二策、欲以河北人還金國、中原人還劉豫。帝曰、檜言南人歸南、北人歸北。朕北人、將安歸」となっている。

13 檄文 原文は「羽書」。『後漢書』卷八十七西羌傳論に、「(群種は)東のかた趙魏の郊を犯し、南のかた漢蜀の鄙に入り、湟中を塞ぎ、隴道を斷ち、陵園を焼き、城市を剽す。傷敗踵係き、羽書日びに聞く」とあり、李賢注に「羽書は即ち檄書なり」と説明する。

14 秦檜が封じられた慶国公、魏国公、益国公の三つの爵位。

15 万石侯 「万石」は高禄の大官を指す。『史記』卷一百三の萬石君傳に、「奮の長子健、次子甲、次子乙、次子慶、皆馴行孝謹を以て、官階二千石に至る。是に於いて景帝曰く、石君及び四子は皆二千石、人臣の尊寵乃ち其の門に集まれりと。奮を號びて萬石君と爲す」とある。

16 龍津雜記 不詳。

上げ、血がダラダラと流れるにまかせた。

悟空は、「これはほんのお遊びで、秦丞相、本気にさせないように」と言い終わるや大笑い。

さらに読み進めていく。

八年、右僕射を拜す。金使和を議し、王倫¹⁷と俱に至る。檜は宰執と共に入りて見ゆ。檜は獨り身を留め¹⁹、「臣僚は首尾を畏れ、与に大事を断ずるに足らず。若し陛下決して和を講ぜんと欲すれば、乞う顛ら臣と議されんことを」と言えり。帝曰く、「朕は獨り卿に委ねん」と。檜曰く、「願わくは更に三日お思がえあそばされんことを」と。²⁰

[八年、右僕射に任命された。金の使者が和議をもちかけたので、王倫とともに朝廷に赴いた。秦檜は宰相たちとともに皇帝に見えた。秦檜はただ一人その場にとどまり、「臣下たちは関わり合いを恐れており、重要な案件を決断するなどできません。もし陛下が金との和議を積極的に進めたいと思われるなら、私とだけ相談なさって下さい」と述べた。皇帝はそれに対して、「朕は君だけに委任したいと思う」と答えた。秦檜、「願わくはさらに三日間お考えになって下さい」]

悟空が言った、

「ちよいと尋ねるが、おまえは和議の成立を図り、火のついたように急いでたくせに、またどうしてそこで三日も待てたんだ。万一、その時廷臣が血判状を作り、忠臣決死党を結成したら、おまえの事業はたちまち

17 刀山は地獄の責苦の一つ。『三昧海經』觀佛心品に、「獄卒羅刹は罪人を驅蹙して刀山に登らしむ。未だ山頂に至らずして刀は足を傷つけ、乃ち心に至る」とあり、「小刀山」はそのミニチュアであろう。

18 南宋の外交官。金との和議、二帝の靈柩の返還、領土策定交渉にあたった。二度にわたり金に拘留され、最後に金に殺された。

19 朝会が散じた後、皇帝に請うて単独で残留し、上奏することを「留身」という。邵伯温の『邵氏見聞録』卷八に、「李宸妃薨じ、章獻これを秘し、宮人の常禮を以て喪を外に治めんと欲す。文靖（呂夷簡）早朝に、留身せられ、奏して曰く、禁中の貴人暴かに薨ず、喪禮は宜しく厚きに従うべし」とある。

20 この部分「秦檜傳」は次のようになっている、「八年三月、拜右僕射、同中書門下平章事兼樞密使。五月、金遣烏陵思謀等來議和、與王倫偕至。十月、宰執入見、檜獨留身、言、臣僚畏首尾、多持兩端、此不足與斷大事。若陛下決欲講和、乞顛與臣議、勿許群臣預。帝曰、朕獨委卿。檜曰、臣亦恐未便、望陛下更思三日、容臣別奏」。

おじゃんになったはずだ」

「殿下、その時いたのは秦姓の皇帝だけ²¹、なんで趙姓の皇帝²²がおりましょ。犯鬼²³は朝臣のエンマ帳²⁴を持っていていつも袖口に入れておりました。もしも軽率な朝臣がいて、秦に背き趙の味方をしたら、その官人の首は即座に飛びます。殿下は決死の忠臣とおっしゃるが、盤古氏が混沌の中から生まれてこのかた²⁵、それが元の混沌にもどるまでに、忠臣が何人出現しましたか？当時朝廷に一人忠臣がいたとしても、彼が単独で党派を作るなんて事がありえましょか？党派が出来ぬ以上、秦檜は気分よく過ごしました²⁶。」

「それならば、おまえの目には宋の天子の御殿はどう見えていたのか？」
「当時犯鬼の眼に殿上の百官はみなアリに映りました」

古今第一の
奸臣たる秘
訣は、忠臣
の党をぶち
こわすこと
にはかなら
ぬ。

それでよ
し。

悟空は白面鬼卒に、秦檜を石臼で細かく粉に挽き、百万匹のアリに変身させ、当時の廷臣の恨みに報いよ、と言いつけた。白面精霊鬼百名が命を受けると、ただちに高さ五丈、さしわたし百丈の石臼を持ち出し、秦檜を挽いて桃花紅粉水にし、水が地面に流れ出すと、すぐちっほけなアリに変わり、あっちこっちと走り回る。悟空は息吹きかけ役²⁷の王掌簿に秦檜の本体に吹き戻させ、そこで、「秦檜、今じゃ百官がアリか、それとも宰相がアリか？」と尋ねた。秦檜は土気色の顔となり、ひたすら哀号するばかり。

21 秦檜を指す。

22 趙は宋朝の皇帝の姓。

23 「犯人」のもじり。「犯鬼」と自称しているのは、もちろん秦檜がすでに死んでいるためである。

24 エンマ帳 原文は「脚本」。後世になるが、清の彭元瑞『知聖道齋讀書跋』二盡書録に、「(季振宜)是の書を以て貽らる、朱墨は皆荆川(唐順之)の筆なりと云う。書中を細かに閲るに、絶えて批評無く、但だ圈抹有りて、其の讀書の意を得ず。既にして荆川右編を取りてこれを勘べるに、まことつたもの圈は皆右編に入り、抹したものは節去す。始めて知る即ち其れ右編を纂せし時の脚本なるを」とある。

25 徐整『三五曆記』(『太平御覽』卷二)に、「天地は混沌として雞子の如く、盤古其の中に生まる。萬八千歳、天地開闢す」と言い、天地創造の中で成長した最初の人類ということになる。

26 原文は「安康受用」。「安康」は安楽な様子。『雲笈七籤』卷五十七の「服氣論第二」に、「凡そ氣を服し穀を斷つ者は、四句の時に、顔色漸く悦び、心獨り安康たり」とある。「受用」は楽しいこと。『醒世恒言』卷十に、「我一發把媚藥方兒傳授與你、包你一世受用不盡」(私が媚藥の処方箋を全部お前に伝授するので、お前は一生楽しめるよと請け合うよ)とある。

27 原文は「吹嘘」。『隋書』卷七十五儒林傳王孝籍に、「咳唾は以て枯鱗いけに足り、吹嘘は用て窮羽を飛ばす可し」とあり、息を吹きかけることを言う。また王喬や赤松子が行った吐故納新の養生術との関係を指摘できるかもしれない。

悟空はさらに、「秦檜、今ここでもう一度言ってみろ、当時宋の天子はおまえの眼にどう映っていたか」と言った。

秦檜による描写は限りなく真に迫り痛快そのものだ。

「^{それがし}犯鬼が朝会に列席した時、五本爪の龍²⁸を描いた絹の^{うわぎ}袍は、我が家の衣裳箱の古着に見え、平天冠は私のボロ頭巾²⁹に見え、日月扇は芭蕉の葉に見え、金鑾殿は我が家の書齋に見え、宮門は我が家の寝室に見えました。もし趙陛下についてお話しするならば、一匹の草色トンボがグルグル飛び廻っているとしか見えませんでした」

悟空は、「まあいい、ではご苦労だがひとつ天子になってもらおうか」と言って、天煞星³⁰の部下幽昭都尉を呼び出し、秦檜に煮えたぎる油の中で沐浴させ、両脇を切開して四枚の羽を作り出し、トンボの姿に変身させた。

悟空はまたもとの姿に吹き戻させ、尋ねた、

「秦檜、お前にちょっと尋ねるが、おまえは三日間ヒマでしようがなかったろう、どうやってヒマをつぶした」

なんと奸臣

「^{それがし}秦檜にどうして余暇がありましょう」

とは大忙し

「おまえは奸臣賊臣で、西の戎³¹を殺し、北の虜³²を撃退する必要もなく、道德³³を振興し、人民の本分³⁴を明確にする必要もないのに、何が余暇がないだ」

なのだ。

「殿下、わたしは三日の間、官僚たちを監視するのに忙しかつたのです。秦に加担する者があれば、すぐに朱墨で名前の上に赤い点をつけま

28 五爪の龍は天子の象徴である。

29 頭巾 原文は「方巾」。『三才圖繪』衣服一卷に、「方巾、此れ即ち古の所謂巾角なり。制は雲巾に同じく、特だ雲文を少く。相傳う、國初これを服するは四方平定の意を取るなり」とある。

30 凶神。普通は「天罡星」と書き、北斗七星を中心とする三十六の星を指す。『水滸傳』の英雄のうち、主な三十六人は「三十六員天罡星」と称される（楔子）。なお「天煞星」は現代漢語では、凶神ないしは殺し屋の意味で普通に使われる語彙となっている。

31 西戎 古代中国西北地域の民族を総称してこう呼んだ。『尚書』禹貢に、「織皮の崦嵫析支渠搜の西戎は玁狁に即く」とある。宋代においては西夏を指すか。

32 古代中国で匈奴など北方民族を指した。例えば『後漢書』卷四十五袁安傳に、「竇憲は日に己の功を矜り、恩を北虜に結ばんと欲す」とある。宋代においてはもちろん金を指すことは言うまでもない。明代には韃靼（モンゴル族）を指し、「北虜南倭」などと称された。

33 道德 原文は「綱常」。君臣・父子・夫妻を三綱、仁・義・礼・智・信を五常とする。用例としては、『齊東野語』卷十四巴陵本末に、「古今に亡ぶべからざるの理有り。理とは何ぞや、綱常是なり」とある。

34 本分 原文は「名分」。『莊子』天下篇に、「易は以て陰陽を道い、春秋は以て名分を道う。」人間の地位身分とそれにとりまなう義務を意味する。

す。点の大きいのは、堂々とそれを公言してる者、点の小さいのは、少し腰の引けてる者です。堂々と公言している者は、後日より高い官職に就け、少し腰の引けてる者は、後日人事異動の折ちよっと割を喰います。それから、^{わたし}秦に加担しようかしまいか、^{てんし}趙に加担しようかしまいか、迷っている手合いは、名前の上を空白にしておきます。後日ふいうちで放逐してしまえばおしまいです。ちよっとでも^{てんし}趙に加担しようとする者にぶつかれば、濃い墨でマルを書き、大きなマルなら罪は大、小さなマルなら罪は小。あるいは一家を皆殺し³⁵、あるいは妻子を罰し、あるいは三族³⁶を滅亡させ、九族³⁷を誅殺する。すべて私の胸先三寸にかかっていました」

悟空はカッとして、大声で、
「張・鄧の兄貴たち³⁸、張・鄧の兄貴たち、なぜやつを早く打ち殺さない？ やつをこの世に放つたらかしくして、あんなことをやらせるとは。まあいいや、鄧公の^{かみなり}霹靂を使わなくたって、^{おれさま}孫公の霹靂があるわい」

と叫ぶと、雷公に扮した鬼使一万名に、それぞれ鉄の鞭を一本ずつ持たせ、秦檜の影も形もなくなるまで打ち据えさせた。

悟空はまた判官に命じ、もとの姿に吹き戻させ、さて再びもとの冊子に目を通した。

三日が過ぎりれば、復た身を留め、事を奏すること故の如く、帝の意は已に動けり。檜は猶お其の變わるを恐れて、曰く、「望わくは陛下更に三日お思えあそばされんことを」と。又三日し、和議乃ち決せり。³⁹

〔三日が過ぎると、また朝会終了後一人その場にとどまり、前回と

35 一家を皆殺し 原文は「滅満門」。『史記』卷一百二十八龜策列傳に、「(邱子明の屬)素もと毗睚の不伏有れば、公に因りて誅を行ひ、恣意に傷つくる所、以て族を破り門を滅ぼす者、數うるに勝うべからず」とあり、これを強めたのが「滅満門」である。

36 三族 原文は「三黨」。父族・母族・妻族の三族を指す。『古今小説』第十八に、「老爺不信時、移文到盤屋縣中、將三黨親族姓名、一一對驗、小人之冤可白矣」(旦那様がお信じになれないのでしたら、文書を盤屋県にまわして、三族の姓名を一つ一つ照らし合わせれば、私めの冤罪は晴れましょう)とある。

37 自分を中心に四代溯った先祖、四代下った子孫を称する。

38 張・鄧の兄貴たち 彼らは雷神であるが、その系図が『道法會元』(道藏所収)の卷八十二にあがっている。そこには「張帥、諱は兩+明…功を以て張の地に封ぜられ、故に張姓なり」、「鄧帥、名は鬱光、字は伯温」などとある。

同様の上奏を行うと、帝の気持ちはすでに動いていた。秦檜は帝の気持ちが変わるのを恐れ、「願わくばさらに三日間お考え下さい」と申し上げた。三日がたち、和議が決定した]

「おまえはその三日間どんな風のにんびりしていたのか」

「^{それがし}犯鬼はその三日ヒマなんかありませんでした。わたしが朝廷に出仕しました時、宋の陛下は和議の意思を固めておられ、蜜みたいに甘い甘い事態が出来あがっていました。宮門を出ると、すぐに宴席をしつらえ、銅鳥楼⁴⁰の中で、宋を滅ぼし金の手助けをし、秦を助け自らの国を建てる祝賀会をやり、一日中酔っ払い、次の日は秦に加担する官僚を家に集めて大宴会、当日は金の音楽を演奏、「飛花刀児^{つるぎのまじ}」の舞を楽しみ、ほんの少しも宋朝のものを使わず、一回たりとも宋朝に触れず、また一日中酔っ払い、三日目はただ一人で掃忠書室⁴¹に坐り、一日中ひたすら馬鹿笑い、夜になってまた酔っ払いました」

「その三日間はなかなか楽しい酒だったな。今日はまた美酒を何杯か宰相に献じよう」

と悟空は言う、そこで鑽子鬼二百名に命じ、人の膿を入れた酒がめ一つかつぎ出し、秦檜の口に注ぎ込ませた。悟空はのけぞって大笑い、「宋の太祖が苦心惨憺した天下は、秦檜によってワクワクウキウキで持っていかれてしまったぞ」

世人への警鐘となる。

「今日頂いたこの膿酒はまったくひどい味です。やれまあ、殿下、今後秦檜になる人も多し、今だって秦檜になる者には事欠きません。なんでこの秦檜一人だけを苦しめるのですか？」

「おまえに現在の秦檜の師匠になれ、将来の秦檜の模範になれと、誰が仕向けた！」と悟空は言う、ただちに金瓜精鬼に命じ、のこぎりを持って来て秦檜をキリキリに縛り上げ、破片になるまでひき切らせた。そばにいた吹嘘判官があわてて吹き戻す。

39 この部分は秦檜伝では次のようになっている。「又三日、檜復留身奏事、帝意欲和甚堅、檜猶以爲未也。曰、臣恐別有未便、欲望陛下更思三日、容臣別奏。帝曰、然。又三日、檜復留身奏事如初、知上意確不移、乃出文字乞決和議、勿許群臣預。」

40 「銅鳥」は銅製の鳥の形をした風見鶏を指す。『三輔黃圖』卷五臺榭に、「郭延生述征記に曰く、長安宮の南に靈臺有り、高さ十五仞。上に渾儀有り、張衡の製る所なり。又た風を相る銅鳥有りて、風に遇わば乃ち動く」とある。宴会を開いた建物に風見鶏がついていたのだろう。

41 「忠義の人を掃蕩する」という意味をもたせた斎号。もちろん架空のものである。

悟空はまた冊子を見た。

和議已に決し、秦檜は金人を挾にし、以って自ら重しとす⁴²。

[和議の方策が決定すると、秦檜は金の勢力をかさにきて、いばりくさった]

悟空はまたどなった、

「秦檜、おまえが金人を後ろ盾にしていた時、何百斤の重さを感じたか？」

「わたしが金人を後ろ盾にしていた時、鉄製の泰山と同じ程の重さ⁴³がありました」

「泰山は何斤か知っているか」

「大体一千万斤ぐらいでしょう」

「大体では不確かだ、おまえ自分で一匁一厘まで計ってみろ」

と悟空は言い、銅骨鬼使五千名に命じ、鉄製の泰山を担ぎ出させ、秦檜の背中にぐっとばかり載せた。

一時ばかりして、のけてみると、秦檜は一枚の血みどろのせんべいになっていたのだった。

悟空はまた吹き戻させ、さらに尋問を重ねた。

また冊子を見てみると、

諸将向う所捷^{から}を奏するも、檜は力めて班師^{たいきやくしゅう}を主す。九月、詔して諸路の將軍を還さしむ⁴⁴。

[將軍たちはいたるところで勝利を上奏してきたが、秦檜は強く撤兵を主張した。九月詔勅を下して各地の將軍を帰還させた]

悟空はそこで尋ねた、

「將軍たちは馬を飛ばして朝廷に帰還したのか、歩いて帰還したのか」

判官が報告した、「殿下、そりゃもちろん馬を飛ばして帰還いたしま

42 この部分秦檜伝では次のようになっている。「王庶與檜尤不合、自淮西入樞庭、始終言和議非是、疏凡七上、且謂檜曰、而忘東都欲存趙氏時、何遺此敵邪。檜方挾金人自重、尤恨庶言、故出之。」

43 泰山の重さに関する表現としては、司馬遷の「任少卿に報ずる書」の、「人固より一死有り、死は或いは泰山よりも重く、或いは鴻毛よりも軽し」である。『補』のこの部分で問題にされているのは泰山の実際の重さであり、そのずれがまことに面白い。また、『記』三十三回に、銀角の計略で悟空が須弥山、峨嵋山、泰山に押しつぶされる場面があり、それを意識していることはまちがいない。

44 この部分秦檜傳では次のようになっている。「時張俊克亳州、王勝克海州、岳飛克郾城、幾獲兀朮。張俊戰勝於長安、韓世忠勝於泃口鎮、諸將所向皆奏捷、而檜力主班師。九月、詔飛還行在、沂中還鎮江、光世還池州、鑄還太平。飛軍聞詔、旗靡輒亂、飛口喏不能合。」

した」

悟空はそこで変動判官に命じ、瞬時に秦檜を花蛟馬⁴⁵に変えてしまった。数百人の悪鬼が、馬にまたがるやら、ぶちのめすやら、半時ほどして悟空はようやくもとの姿に吹き戻させた。

さらに冊子のつづきを見る。

一日に十二たび金牌⁴⁶を奉じ、岳飛をして班師せしむ。飛既に歸れば、得る所の州縣、尋いで復たこれを失う。飛は力めて兵柄を假らんと請うも、許されず。兀朮は檜に書を遣り、檜は以って然りと為す。諫議大夫万俟卨⁴⁷は飛に怨み有るを以って、尙書^{そそのか}を飛を劾せしむ。又た張俊^{だんがい}⁴⁸に諭し王貴^{おびや}⁴⁹を劾かし（原文は「劾」）、王俊^{たくら}⁵⁰を誘いて張憲^{だんがい}⁵¹が飛に兵を還すを謀むと誣告せしむ。檜は使いを遣して飛父子を捕らえ、張憲の事を證せしめんとす。初め何鑄^{つかわ}⁵²に命じてこれを鞠せしめるに、裳忽ち自ら裂け、背上の盡忠報國の四字、深く膚理に入りこめるが露出す。既にして閔實するに左驗無く、鑄は其の無辜を明らかにす。改めて万俟卨に命ず。尙書^{けんさつ}⁵³に入りて月餘、獄遂に上らる。是において飛は衆くの證を以て坐死せらる。時に年三十九。⁵⁴

45 「花蛟馬」という言葉は見つけられなかった。李白の「將進酒」の「五花馬、千金裘」に準ずる表現とすれば、「まだらの馬」の意味となる。

46 宋代の朝廷が発した文書の中で、最速・最緊急の文書を送達する駅伝が携帯する木の牌。『夢溪筆談』卷十一官政一に、「驛傳に舊くは三等有り。歩遞、馬遞、急脚遞と曰う。急脚遞最も速く、日に行くこと四百里、唯だ軍輿のみ則ちこれを用う。熙寧中、又金字牌急脚遞有り、古の羽檄なり。木牌・朱漆・黄金字を以てし、光明目を眩し、過ぎこと飛電の如く、これを望む者路を避けざる無く、日に行くこと五百餘里」とある。

47 万俟が姓で尙が名、字は元忠。秦檜と並ぶ有名な奸臣。以前岳飛が自分に礼を尽くさなかったことで飛を恨み、秦檜の意向をうけて無実の罪をでっちあげ、飛を処刑した。後に參知政事、そして尚書僕射同中書門下平章事となった。

48 張俊、字は伯英、金との戦争で軍功を立て、樞密副使となった。秦檜の対金融和策に賛同したので、秦檜は岳飛ら主戦派の兵権をすべて張俊に付与した。秦檜の党羽として評判が悪い。

49 岳飛の武將。秦檜・張俊に岳飛を告発せよと迫られ、最初は屈しなかったが、後に「劫すに私事を以て」され、告発に同意した。なおこの「劫」は『宋史』卷三百六十五岳飛傳によって「劫」に改めて読むのが妥当であろう。

50 岳飛の武將。秦檜の示唆をうけて張憲を告発した。『宋史』卷三百六十八張憲傳参照。

51 王貴とともに岳飛に従い軍功をあげた。秦檜が岳飛の軍権を奪った際に、岳飛のために軍権奪回を画策していると誣告され、岳飛父子とともに逮捕され、処刑された。『宋史』張憲傳参照。

52 字は伯壽。徽宗政和五年進士。御史中丞の任に在った時、岳飛を取り調べ、冤罪を確信して秦檜に処刑が不可であると進言したが聞き入れられなかった。

53 御史台すなわち検察庁を指す。

[一日に十二回金字牌を掲げた緊急の使者を派遣し、岳飛に撤退させた。岳飛が撤退すると、せっかく回復した州や県がちまちち奪われた。岳飛は懸命に軍の指揮権を与えて下さいと要請したが、許されなかった。兀朮は檜に書簡を送り、檜はその内容に同意した。諫議大夫万俟卨は飛に怨みがあったので、秦檜は万俟卨をそそのかして岳飛を弾劾させた。さらに張俊を教唆して、王貴を脅し、王俊を誘って張憲が岳飛に指揮権を還すように陰謀をたくらんでいると誣告させた。秦檜は使いを派遣して岳飛父子をとらえさせ、張憲の案件について証言させようとした。当初何錡に命じて岳飛を尋問させたが、岳飛の服が突然裂け、背中に彫りこまれた尽忠報国の四文字が現れた。調査したが、証拠が出て来なかったので、錡はかれが無実であることを明らかにした。そこであらためて万俟卨に取り調べを命じた。万俟卨が御史台に入って一月余り、罪状が皇帝に奉られた。そこで、岳飛は数多くの証拠を挙げられて坐死した。享年三十九歳。]

悟空はそこでどなった、「秦檜、岳將軍の件はどうだ？」

その声も終わらぬうちに、見れば階下に百人の秦檜がひれふし、わあわあ泣き叫んだ。

悟空は、

「秦檜、おまえは一つの体でもう十分だ。宋朝がどうして百個の天下を持つてる！」とどなりつけた。

「殿下、ほかのことはまだよろしいのですが、岳殿下の一件となりますと、それがし犯鬼の手元には拷問を受けるに足る皮や肉がありませんし、あまたの尋問に返答できるほどの豊富な言葉が見当たりません。たとえ百人分の

54 『宋史』卷三百六十五岳飛伝でこの部分は次のようになっている。「一日奉十二金字牌、飛憤惋泣下、東向再拜曰、十年之力、廢於一旦。…飛既歸、所得州縣、旋復失之。飛力請解兵柄、不許。…檜亦以飛不死、終梗和議、己必及禍、故力謀殺之。以諫議大夫万俟卨與飛有怨、風厲劾飛、又風中丞何錡、侍御史羅汝楫交章彈論。…檜志未伸也、又論張俊令劫王貴、誘王俊誣告張憲謀還飛兵。檜遣使捕飛父子證憲事、使者至、飛笑曰、皇天后土、可表此心。初命何錡鞠之、飛裂裳以背示錡、有盡忠報國四大字、深入膚理。既而閱實無左驗、錡明其無辜。改命万俟卨。…飛坐繫兩月無可證者。…歲暮、獄不成、檜手書小紙付獄、既報飛死、時年三十九。」『西遊補』では岳飛の衣裳が「自ら裂け」となっているが、『宋史』では岳飛が自分で脱いだことになっており、喰い違っている。また『西遊補』では触れていないが、『宋史』によれば万俟卨はこの案件を立証できなかったことになっている。

体でもそれがし犯鬼には少のうございます」

悟空はそこで各部門の判官に、各人が一名ずつ秦檜を連行し、尋問し拷問するように言いつけた。瞬時に九十九人の秦宰相が散らばり、そっちでは「岳殿下の件はそれがし犯鬼とは無関係です」と叫び、あっちでは「閣下のお慈悲でそれがし犯鬼をひと叩きでも手加減して下さればもう御の字です」と叫ぶといった具合である。

悟空は胸がスーッとし、そこで机の前の判使に向って、
「この事件は、もともと刑法⁵⁵の適用を議論する余地などないのだなあ」と言いますと、曹判使はあえて言葉を返さず、ただ手にした冊子を差し出して御覧に入れた。

悟空が開いて見ると、それはなんと各法廷が昔下した判決文であった。一番目の判決に記されるのは、

当番の嚴判事

秦檜は青蠅⁵⁶の性をもち、赤族⁵⁷の誅を構む。岳飛は白雪の操を存ち、黄旗⁵⁸の烈を壮んにす。檜を愚賊と名づけ、飛を精忠⁵⁹と曰う。

「秦檜は他人の悪口ばかり言う人柄で、一族皆殺しの陰謀をたくらんでいた。岳飛は白雪のような高潔な節操をもち、軍容はまことに盛んであった。秦檜を愚賊と名づけ、岳飛を精忠と名づけよう」

悟空「このたぐいはとにかく手ぬるい。「愚」の一字では秦檜を言い負かせないぞ。」

二番目の判決には、

当番の黎判事

秦の構みは彌綸し⁶⁰、楚の騷は悱惻しむ⁶¹。

「秦檜の企みは天地を包み込んでしまい、楚辞の離騷は悲しい調べ」

55 『國語』卷十四晉語八に、「刑法を端し、訓典を緝めれば國に奸民無し」とある。

56 『詩經』小雅青蠅に、「營營たる青蠅、樊に止まる。豈弟たる君子、讒言を信ずる無かれ」とあり、他人を中傷してばかりいる人物を指す。

57 『漢書』卷八十七揚雄傳に「揚子應えて曰く。客は徒だ吾が殺を朱丹んと欲するのみにて、一たび跌けば將に吾が族を赤めんとするを知らざるなり」とあり、顔師古注に「謀殺さるる者は必ずや血を流す、故に赤族という」と説明する。

58 『尉繚子』經卒令第十七に、「中軍は黄旗、卒は黄羽を戴す」とあり、軍隊が用いる旗であることはまちがいない。

59 『宋史』岳飛傳に、「秋、入見す。帝は手ずから「精忠岳飛」の字を書き、旗に製りて以ってこれに賜う」とある。「精忠」の二文字はもと比干に対して使われた言葉である（『抱朴子』博喻）。

また文士を罵った。

「バカバカしい、賊臣秦檜の本末もちゃんと説明できないくせに、まだ表現を工夫しているヒマがあるとは⁶²。まさにいわゆる文士に裁判指揮はムリというやつだ。最後まで見る必要はない」

そこで三番目の判決文を広げてみると、

当番の唐⁶³判事

岳將軍を弔う詩 誰か三字の獄を將^もつて、この萬里の城を墮^{くず}す。北望
真に涙す堪^べく、南枝 空しく自ら縊^{まっける}る。國は身に隨^{とも}って身と共に盡^{はろ}
び、相は虜^{まじしやう}と俱に生く。落日 松風起り、猶お聞く劍戟の鳴るを。
[三字の獄を構成して、万里の長城たる岳飛將軍を殺してしまったのは誰だ。(南に住む人々が)北を望めば涙が出てくるし、(北側の鳥は)むなしくも南の枝にまわりつく。国は岳飛とともに亡び、宰相は異民族の連中とともにのうのうと生きている。夕日照り映える中松風が起り、その中から今なお劍戟の響きが聞こえてくるようだ]

「この詩の方は断固としたもの言いだ」

そこで大声で、「秦檜、唐殿下の詩で、「相は虜と俱に生く」の五字は五字の獄だ。これをおまえの三字の獄⁶⁴と対にしたらいかがかな？おれはおまえの三字の獄も唐殿下の五字の獄も使わない。おれには一字の獄というものがある」

判官「殿下、何を一字の獄と言いますので？」

悟空が「剛^{きりまき}き⁶⁵だ！」と言うと、即時にボサボサ頭の鬼卒が百名、窯を一つ担ぎ出し、金牌を十二個鑄造した。

60 原文の「糸+彌」を劉本に従って「彌」に改める。「彌綸」は「易經」繫辭傳上に、「易は天地と準ず、故に能く天地の道を彌綸す」とあり、秦檜の陰謀が、天地を包み込む規模をもっていたことを示唆する。

61 ＊南朝梁の裴子野「雕蟲論」(「文苑英華」巻七百四十二)に、「俳嘲の芳芳たるが若きは、楚驢これが祖と爲る」とある。

62 「秦の構」と「楚辭の離騷」を対句とし、岳飛を屈原に喩える、このような表現上の工夫。

63 この唐判事は明代の文学者唐順之を暗示する。以下判決文に引かれた「岳將軍を弔う詩」は「荊川先生文集」巻二に収める「岳將軍墓」の詩を借用している。ただ、四句目「南枝空自縊」の「縊」は「荊川先生文集」では「縊」に作る。

64 岳飛は「莫須有」(あるいはそうかもしれない)という秦檜の三字の言葉によって冤罪に陥れられた。『宋史』岳飛傳に、「獄の將に上らんとするや、韓世忠平らかならず、檜に詣りて其の實を詰す。檜曰く、「飛の子雲の張憲に與うるの書に明らかならずと雖も、其の事體莫^{ある}いは須^{すべ}らく有るべしと。世忠曰く、「莫^{ある}いは須^{すべ}らく有るべし」の三字、何を以て天下を服せんやと」とある。

65 体を徐々に切り裂き、ゆっくり死なせる刑罰。凌遲とも称する。

簾の外で太鼓が一しきり鳴ると、牙をむき出しにした無数の青面鬼卒が飛び出し、秦檜を取り囲み、まず、魚鱗状に肉片を一つまた一つと切り取って、一度に窯に投げ込んだ。

魚鱗裂きが終わると、悟空はすぐに正簿判官に命じ、一つ目の金牌を熔かさせた。判官は熔かし終わると、声高に、

胸のつかえ
はここまで
来て半分は
消えた。

「殿下、岳將軍召還の一つ目の金牌は熔けました」

と言上。

太鼓の音が一しきり、左側から素っ裸の凶悪な鬼使たちが躍り出て、それぞれ刀を手にし、秦檜を氷紋様に切り裂いていった。悟空はまた正簿判官に命じ、二つ目の金牌を熔かさせた。判官は命令通りにし、声高に、

「殿下、岳將軍召還の二つ目の金牌は熔けました」

と言上。

太鼓の音が一しきり、東側からまた目も口も無い、血面の^{まっか}朱紅な鬼卒が、やはりそれぞれ刀を手にし、雪片状に切り裂いてゆく。判官が金牌を熔かし終わると、声高に、

「殿下、岳將軍召還の三つ目の金牌は熔けました」

と言上。

物語を最後まで
完結させぬところ
がなおすば
らしい。文章に無限の
含蓄あり。

太鼓の音が一しきり、突然正門のあたりでまた太鼓の音が響き、魚のコスチュームを着た小鬼が一人、真紅の大名刺を入れた大型封筒を捧げ呈上。悟空が開けてみると、名刺には次の五文字が記されていた。

宋將軍飛拝⁶⁶

それを見た曹判官は、ただちに一冊の歴代臣下事績記録簿を差し出した。悟空は改めて細かに目を通し、岳飛の事績をしっかりと記憶に留めた。

門のあたりでまた太鼓が響き、簾の外で金笳の音が起こり、やかましく鳴り続けて半時、一人の將軍が目の前に登場。悟空はあわてて正殿を小走りに駆け下り、ちょっと脇へ寄って、拱手の礼をし、

「將軍どうぞ」

66 秦檜を裁く冥府の法廷に岳飛がやって来るという趣向は、明刊の『大宋中興演義』には見られず、『西遊補』より後の『説岳全傳』（康熙年間刊）に出てくる。しかし岳飛に秦檜を搾った血酒を飲ませようとするような悪ふざけは『説岳全傳』には見られない。

悟空が秦檜を尋問するのは何の変哲もないが、岳飛を師父として拝するのは大奇抜、大奇抜。着眼点。

殿上へ上がってから、また深々と身をかがめ、拱手の礼を行った。簾の中に入るやいなや、好漢悟空は頭を下げて拝礼⁶⁷、
「岳師匠、^{むたくし}弟子は一生にお師匠様が二人おります。一番目は須菩提祖師⁶⁸で、二番目は唐の三蔵法師です。今日は將軍にお目にかかることができ、三番目のお師匠様というわけで、儒・仏・道三教の兼備が完成します。」

岳將軍はしきりに辞退したが、悟空は聞き入れるはずもなく、ひたすら拝礼を続けた。そこで、
「岳師匠、今日はお師匠様のうさばらしにと血で醸した酒を用意してあります」

と大声で言った。

「弟子のご好意かたじけない。しかしきつと飲めますまい」

悟空はすぐにこっそりと書状を一通したため、

「文書送達係の小鬼はどこか？」

とどなった。牛の頭や角の生えた虎の頭の連中が一組、一斉に跪き、
「殿下、なにか御用で？」

と言上。

「おまえたち、天へ上ってくれんか？」

牛の頭の小鬼が言った、「殿下、われわれ地獄に落ちぶれてる悪鬼ども、どうして天へ上れましようや？」

着眼点。「それはおまえが天に上る手立てを持たぬだけで、天へ上るのは難しくない」

一枚の紙を瑞雲に変えると、書状を牛の頭の小鬼にわたした。ふと先日は天門が固く閉まっていた、今日も開いているかわからんぞ、と思いついて、

周到なる配慮。「牛頭よ、おまえはこの瑞雲に乗って行け。天門が閉まっていたら、おまえはすぐに冥土の文書を、兜率宮⁶⁹へ届けに参ります、と言え」

悟空は牛頭の小鬼を使いに出してから、また大声で、

67 頭を下げて拝礼 原文は「納頭便拜」。『水滸傳』卷七十五に、「陳太尉上岸、宋江等接着、納頭便拜」（陳太尉が岸に上がると、宋江らが出迎え、頭を下げて拝礼しました）という用例がある。

68 『記』第一回で悟空が出会い、仙術を授かった師匠。「須菩提」は釈迦の十大弟子の一人須菩提長老の名を借りたとされる。

「岳師匠、弟子は嬉しくてたまりません。あなたの偈のあとを続けさせてください」

「^{でし}徒弟どの、わしは毎年戦場に在り、仏典を一句だって読んだことはありませんし、禅問答を一句だって口にしたことはありません。続けて頂くような偈などどこにありますか？」

「お師匠様、まあおれが続けるのをお聴きになって」

「ふと見れば返書」というのが上手い表現。

君有りては忠を盡くし、臣と爲りては國に報ゆひとりひとり 兩句は岳將軍の語に係る⁷⁰。箇箇が天王、^{ひとりひとり}人人是れ佛。

悟空が唱え終わったばかりの時、ふと見れば牛頭の小鬼が返書を捧げ、頭の上に紫金の葫蘆をのせ、突然階段の前に降って来た。

悟空はただちに、「天門は閉まっていたか」

と尋ねた。

牛頭の小鬼は、「殿下、天門は大きく開いておりました」と申し上げ、太上老君の返書を呈上。

日本の『西遊記』に対応しているところがよろしい。また持ち出して来た。

玉帝の大いに楽しめるは、大聖の秦檜じんこんを勘するに、^{ひとことひとこと}字字が真、^{ひょうちひょうち}棒棒が切なるが為なり。金葫蘆は奉^{きんのひょうたん}上る。單^ただ金鐵の鑽子たがねを忌むゆえ、大聖が心を留められんことを望む。鑿天の一事に至りては、其の説甚だ長ければ、^{はなし}面えし時にまみ悉さん。

[玉帝は齊天大聖が秦檜を尋問するにあたり、一言一言事実に基づき、棒の一打ち一打ちに力がこめられていたので、大いに喜ばれました。金の瓢箪はあなたに差し上げましょう。ただこの瓢箪は金鉄の鑿が苦手なのでお気を付け下さい。天に穴をあけた事件については、話が長くなりますので、お会いした時に相談しましょう]

悟空は読み終えると大笑いし、

69 太上老君の住居。『西遊記』第五回に、「好大聖、揺揺擺擺、仗着酒、任情亂撞、一會把路差了。不是齊天府、却是兜率天宮。一見了、頓然醒悟道、「兜率宮是三十三天之上、乃離恨天太上老君之處、如何錯到此間？也罷！也罷！一向要來望此老、不曾得來、今趁此殘步、就望他一望也好。」（あわれな大聖は、酒に酔ってふらふらと、足任せに歩くうち、道を間違えてしまいました。齊天大聖府ではなく、兜率天宮に来てしまったのです。一目見てそれと悟り独り言、「兜率天は三十三天のてっぺんで、離恨天すなわち太上老君の住まいだが、なんでここへ来ちまったんだ。まあいいや、まあいいや。俺はずっとこの老人に会おうと思っていたのだが、これまで機会がなかった、ついでに彼に会っておくのも悪くはない）」とある。

70 「兩句は岳將軍の語に係る」とあるのは、岳飛の背中に彫られていた例の「盡忠報國」の四文字を指す。

「おれさまは昔蓮花洞でやつの宝物をヤスリで切るんじゃない⁷¹。
今日は逆にこの老いぼれに手厳しくやられちゃった」

そこで岳將軍に拱手の礼をして、

「お師匠様、まあしばらくお坐りになって、わたしが血で醸した酒を用意するのをお待ち下さい」

（評）秦檜の尋問は、孫悟空の愉快きわまる事件であり、『西遊記』
全体の愉快きわまる文章だ。

71 『記』三十四回で、金角・銀角が師匠の太上老君のところから盗み出した幌金繩を悟空がヤスリで切った話を指す。蓮花洞は二人の妖怪のすみかである。

第十回

萬鏡楼ふたに行者重び歸り

葛藟宮に悟空自ら救う

悟空は手で葫蘆を受け取ると、判官にそばへ来いと指示し、ひそひそ耳打ち、何を言っているのかはわからない。葫蘆を判官に渡すと、判官はすぐに階段を降り、空中に飛び上がり、

「秦檜、秦檜」と叫んだ。

檜はその時すでに脳死状態だったが、息はまだあり、一声返事をする
と、たちまち葫蘆の中に吸い込まれていった¹。悟空はそれを見て、

「持って来い、持って来い」

とわめき、判官はあわてて御簾の中に進み入り、葫蘆を悟空に返した。

悟空は「太上老君急急如律令」と記された一枚の封じ紙を張り、葫蘆の口をふさいだ。と、ただちに秦檜は膿汁に変わった。ただちに判官に命じて金爪杯を持ち出させ、葫蘆を逆さまにして血漿を注ぎ込ませた。

悟空は両手で杯を捧げ持ち、岳將軍の前に跪き、

「お師匠様、秦檜の血漿製酒をお飲み下さい」

と言った。岳將軍は押し返して飲もうとしない。

「お師匠様、考え違いをなさってはいけません。宋の国を盗んだ賊は憎みこそすれ、情けをかけてはなりません」

「私だって情けをかけているわけじゃない」

「情をかけているんでなけりゃ、なぜ血漿製酒を一口も飲まれないので」

「弟子よ、お前は知らんのか。人間としてこの世に生きる限り、乱臣賊子の血肉をたとえほんのちょっとでも口にすれば、腹の中が一万年も臭くなるのだ²」

悟空は岳師匠が絶対に飲もうとしないのを見たので、一人の赤心鬼を呼び、ほうびとしてそれを飲ませた。その赤心鬼は飲み終わるや否や、正殿の後ろへかけこんだが、半時ばかりして突然門前で大騒ぎが起こり、門番が鳴鏑鼓³を叩き始め、正殿の階段の下では五方⁴・五色⁵の鬼使、

秦檜が膿汁
になって
やっと裁判
が結審した。

1 『記』三十二回～三十五回、金角大王・銀角大王の話参照。

2 『世説新語』尤悔篇に引く桓温の言葉「既に芳を後世に流す能わず、亦た復た臭を萬載に遺すに足らずや」に基づく。

五路⁶の各殿の判官が誰も彼も勇気を奮い起こしていた。

悟空が判官に何かと尋ねようとした時、白玉作りの階段の前には早くもぼさぼさ髪の鬼卒が三百人もひしめき、青い牙に碧の目、赤い髪に真紅のヒゲの判官の首を捧げて、

まさに痛快
にして奇抜、
ただ赤心鬼
ほどの時代
に生まれか
わったのや
ら。

「殿下、赤心鬼は秦檜の血漿製酒を飲んでから、瞬時に人相が変わり、司命紫府⁷へ推参し、腰の小刀を抜いて、大恩ある判官殿を刺し殺し、あつという間に鬼門関を出て、生まれ変わり⁸に行きました」と報告した。

悟空が一喝して小鬼卒どもを退かせると、岳將軍もすぐに立ち上がった。御簾の外で太鼓が一しきり、管弦の楽が演奏され、槍や刀が触れ合っ
て響きを立て、剣や戟がいかめしく林立する中、五万人の首席判事が頭
を地にこすりつけて岳將軍殿下を見送っている。悟空が「立ち去れ」と
言うのと、首席判事たちはただちにそれぞれの部署へと散って行った。さ
らに無数の青い血赤い筋肉の猛々しい鬼卒が、這いつくばって岳將軍殿
下を見送っている。悟空は「立ち去れ」と言った。

さらに三百名の擁正黄牙鬼卒がそれぞれ宝戟を手にして、「岳將軍殿
下をお見送りいたします」と上申。悟空はそこで黄牙鬼卒に命じ、「岳
殿下を御自宅までお送り申し上げよ」と言った。二人が正門まで来ると、
太鼓が鳴り、金笳⁹が一曲、悟空は拱手の礼をし、さらに岳將軍に随行

3 歴代の王朝において朝堂の外に太鼓を掛け、冤罪を訴えようとする人、緊急事態を上奏しようとする人に叩かせた、「登聞鼓」という制度があった。その連想であろう。『明史』卷九十四刑法志二に、「登聞鼓は、洪武年間に午門外に置かれ、一御史日（みんり）びにこれを監す。大冤及び機密重情に非ざれば撃つを得ず、撃たば即ちに引きて奏せしむ」とある。

4 五方 東・西・南・北・中央の五方を指すのであろう。『禮記』王制に、「五方の民、言語通ぜず、嗜欲同じからず」とある。

5 五色 青・黄・赤・白・黒の五色を指すのであろう。『老子』に、「五色は人の目をして盲ならしめ、五音は人の耳をして聾ならしめ、五味は人の口をして爽わしむ」とある。

6 五路 目・耳・鼻・舌・身の五官を指すのであろう。『墨子』經下第四十一に、「知りて五路を以てせず、説は久に在り」とある。

7 司命紫府 「司命」は人の運命・寿命を管轄する神、『莊子』至楽篇に、「莊子信ぜずして曰く、吾れ司命をして子の形を生じ、子の骨肉肌膚（つひ）を爲り、子の父母妻子閭里の知識（ちか）に反さしむれば、子これを欲するや」とある。また「紫府」の用例としては、『抱朴子』内篇卷二十祓惑篇に、「天上に到るに及びて、先ず紫府に過る」があり、神仙の住居を指す。「司命紫府」で、司命の住む役所ということになる。

8 原文は「托生」。用例としては『廣異記』（『太平廣記』卷三百一所収）崔敏毅に、「王曰く、宜しく更に托生すべし、倍して官禄を與えんと。敏毅は肯んぜず」がある。

した。鬼門関に着くや、太鼓が鳴り、鬼卒たちは一斉にときの声をあげ、悟空は深々と拱手の礼をし、岳將軍を送り出して、大音声で、「お師匠様、機会あらばまたご来臨の上ご教示賜りますよう」と叫び、再び拱手の礼をした。

悟空は岳將軍を見送ると、即座に空中にまっすぐ立ち、平天冠一つ、渦状龍紋の長衣一枚、鉄のように容赦しない靴一足、閻羅天子エンマだいおうと彫られた玉印一個をはずして、鬼門関のかたわらに放り出し、ようやく冥府から歩み去ったのであった。

さて山東に一軒の飯屋^{めしや}¹⁰があり、店には髪や齒はみな抜け落ち、何百歳になったのか分からない主人が一人、一日中店にいて飯を出していた。看板には「新古人飯店ハコチラ」と書かれ、下に小さな文字で一行「旧名新居士」とある。

前文に対応している。

なんと、新居士は矇矓世界から帰ってきた時、玉門関が閉まっていたため、古人世界に入れず、未来世界に仮住まいし、飯屋をやって生活を立てていたのである。この男は昔を忘れてはしない人で、姓名を新古人と改めたのだった。

その日店先にかけて茶を飲んでしたが、ふと見ると、孫悟空が東の方から「獣臭い、獣臭い」とわめきながら、よろめくようにかけて来た。そこで新古人は、

「先生、まあどうぞこちらへ」

と声をかけた。悟空は、

「あなたはどなたです。先生なんて声をかけて来るとは」

「わたしは古代の現代人にして、現代の古代人です。わけを説明すればまったくの笑い話です」

「とにかく話してみてください。笑いませんから」

「わたくしはほかならぬ古人世界の中の新居士です」

悟空はそれを聞いてあわてて改めて両手をこまねいてあいさつし、

9 金筋 北方異民族が使っていた管楽器を指す。南朝齊の高皇帝の「塞客吟」に、「金筋 夜に厲く、羽轡 晨に征く」とある。

10 原文は「飯店」。『水滸傳』第四十三回に、「〔李逵〕走到巳牌時分、看看肚裏又飢又渴、四下裏都是山逕小路、不見有一個酒店、飯店」〔李逵は〕巳の刻まで歩き、腹がへり喉がかわきましたたが、あたりは細い山道で、酒場も飯屋も見えません」とある。

「恩人の新さん、恩人がおられなかったら、おれも玉門関から出られなかったでしょう」

新古人はびっくり仰天、悟空はすぐに姓名・来歴・経緯を一通り話した。新古人は笑って、

「孫先生、あなたはまだわたしに頭を下げようとなさいますか？」

と言った。悟空は、

また元朝に
事寄せて述
べており、
なかなか周
到だ。

「冗談¹¹はさておいて、一つお尋ねしたいのですが、なぜこんなに獣臭いのですか？魚の臭いでもなく、羊でもなし」

「獣臭いのがお好きならこっちへ、お嫌いならこっちへ来ちゃいけない。おとなりさんは韃靼人¹²で、この先ほんのちょっと行ったら、もう全身が獣臭くなっちゃいます」

悟空は聞いて、ひそかに思った、

またあの話
を持ち出し
て来た。

「おれさまはけむくじゃらだ。もし万が一獣臭いのを浴びたら、生臭ザルになっちまう。おまけにたった今エンマ大王の臨時代理になって秦檜一名をギタギタになるまで処罰したばかり。考えてみりゃ秦の始皇帝の姓も秦だし、秦檜の姓も秦で、始皇帝の子孫でなけりゃ、やつ一族に違いなし¹³。始皇帝はブンブン腹を立て、駆山鐸もそうあっさりとはわたくししてくれまい。もし手荒なことをして強奪したら、おれさまの名声に傷がつくのがまた怖い。それよりも新居士に一声尋ねて、鏡から飛び出した方がいいわい」

悟空はすぐに大声で、「恩人の新さん、青青世界へは、どう行けばよいか知ってますか？」

新古人が言った、「^{きたみち}来路¹⁴即ち^{ゆくみち}是れ去路¹⁵」

「こりやまた軽薄な禅問答¹⁶ですな。おれは来た路について知ってます。ただ古人世界から未来世界へまっすぐ転がり落ちるのは簡単だけど、

11 冗談 原文は「弄口」。『梁書』巻十六王亮傳に、「口を弄び舌を鳴らし、^た祇だ非を飾るに足る」とある。

12 韃靼人が獣臭くて仕方がない、というのは直接的には南宋を滅ぼすことになる元（モンゴル帝国）を指しているのだが、『西遊補』が書かれる二年前、一六三八年（崇禎十一年）に山東地方に侵入した清軍を暗示している可能性もある。

13 全くのこじつけである。始皇帝の姓は嬴。

14 唐代許渾の「滄浪峽」詩に、「紅蝦 青鯉 紫芹脆し、歸去するに來路の長きを辭せず」とある。

15 唐代項斯の「漢南にて友人に遇う」詩に、「積雲 去路を開き、曙雪 前峰に疊る」とある。

もし未来世界へまっすぐ転がり上がるとなると、こりゃ面倒です」

- ありゃりゃ、 「それならばわたしといっしょに来た、いっしょに来た」
- 大聖が鏡から出たぞ。 悟空の手を引っ張り、どんどん歩いて行き、緑の水をたたえた池のほとりに来た。新古人はまったく何も言わず、悟空をトーンと一突きすると、ドボンと水音、元通り万鏡楼の中に転がり出たのだった¹⁶。
- また持ち出して来た。 悟空はあたりを見廻したが、どの鏡から出たのか分からない。時間が経ってしまっ御師匠様の身に何か起こるのではないかと心配し、くる

16 軽薄な禅問答 原文は「花油禪話兒」。「花油」の用例は見出せなかったが、意味は同じで、「花油」をひっくり返した「油花」は、明末清初の『豆棚閑話』第十則に、「有幾箇油花和尚、挾了疏簿上前打話、求他布施」（何人かの口のうまい和尚が、奉加帳を持ってあいさつに行き、布施をお願いします）とある。「禪話兒」はもちろん禅問答を指す。

17 緑の水をたたえた池のほとりに来た 水は水鏡であり、その裏はまた万鏡楼の鏡なのである。悟空が最初に鏡に入った第三回では、「銅喰い虫」に化けた悟空が、硬い鏡の表面を突き破って中に入るという展開であったが、この鏡の表面はやわらかい。「……キティ、鏡のお家へは行っていたらすてきじゃないこと！きついろんな、ええそうよ、いろんなきれいなものがあるはず！ごっこをしましょう、なんとかなかには行っていけることにするの、ね、キティ。鏡がガゼミたいにすっかり柔らかくなったことにすれば、は行っていけるでしょ。ほうら、濡みたいになってきた、ほんとよ！簡単に通り抜けられそう——」こういいながら彼女は、自分でわからないうちにいつのまにかマントルピースの上へあがっていた。そして確かに鏡は、きらきらと銀色に光る霧のように溶けはじめていた。つぎの瞬間、アリスは鏡を通り抜け、鏡の部屋にふわっと飛び下りていた。（『鏡の国のアリス』柳瀬尚紀訳）西遊補で悟空の身に起きた事態もまさにこれと同じであった。さらに宮川淳はこう書く。「ポール・エリュアールは書く。そしてぼくは鏡のなかに降りる死者がその開かれた墓に降りていくようにコクトオのオルフェウスもまた鏡をとおりぬけて冥府に降りてゆく。そして、なによりもわれわれは鏡のなかに落ちることをおそれるのだ。鏡のなか、鏡の底——この表現は、しかし、どこから生まれてくるのだろうか。鏡の背後に水のイメージがあり、そして、そこにひとりの若者が自分の姿を映している……いや、ナルシスの神話でさえ、逆にこのようなイマジナルに根づいてこそ、成立しえたのではないだろうか。」（『鏡について※』『宮川淳著作集』Ⅰ）鏡をめぐる美しい言葉の群の中に、万鏡楼に始まり、水の鏡に終わる董説の言葉を置いてみる時、後世のルイス・キャロル、宮川淳に比して遜色が無いどころか、華麗さ豊富さの点ではるかにまさっていると考える。「絵画の中に入る」という伝奇小説の枠組みがあり、それが小説的想像力の限界だったのだが、かれはそれを軽々と突き破ったのである。さらに最近ルイスキャロル『鏡の国のアリス』に「*鏡の発見*」（柳瀬尚紀訳）がなされた。日経新聞「文化往来」欄（2010年6月9日）の記事によると、「鏡の中の世界にもう一つ鏡があったのではないか。ルイス・キャロルの児童文学作品『鏡の国のアリス』に関して、銅板画家の山本容子氏が新説を唱えている。『鏡の国のアリス』はチェスの棋譜を下敷きに物語が進む。鏡の中の世界に入った少女、アリスはポーンとしてチェス盤（縦横各8マス）でもある世界を、川や森を越え奥に進んでいく。だが山本は「少女が1人で森の奥に入っていくのは不安」と考え、チェス盤を上下に分割するように下から4段目中央に鏡を置くことを想定。鏡があるとすれば、アリスは途中まで進んだのち方向転換して出発点に戻って来ることになる。最後のチェックメイト（詰み）の局面も、キング（父）とクイーン（母）が隣同士に並ぶ形になる。物語中盤で双子の小男が登場、アリスが双子とともに踊り回ることなどが、鏡の存在と方向転換を示唆しているのではとみる。」董説の『西遊補』も、水鏡が登場する未来世界が物語の空間の最深部になっており、ルイス・キャロルと同工異曲の妙がある。

りと向きを変えて下へ降りようと、半時も探したが、階段一つ見当たらない。いらいらして玻璃の窓を左右に押し開けてみると、窓の外はすべて精巧な氷紋様に組み上げられた真紅な欄干であった。有難いことに欄干の紋様の作り方がとても大まかだったので、悟空は頭から突っ込み、急ぎ脱出しようとした。

ところが運の悪い時というものはあるもので、なんと欄干が人を縛るのである¹⁸。どう見たってただの氷片紋様の欄干なのに、突然何百本もの赤い糸に変わり、悟空をぐるぐる巻きにし、まったく動けない。悟空があわてて一粒の真珠に変身すると、赤い糸はただちに真珠網になり出られない、悟空がまたすぐ鋭利な剣¹⁹に変身すると、赤い糸はその瞬間に剣匣^{かたなばこ}²⁰に。

悟空はなすすべもなく、再びもとの姿にもどり、

「お師匠様、今どこに！弟子がこんな苦難²¹に遭っているのをご存じないのか？」

と呼びかけるしかなかった。言い終えると、涙が泉のようにあふれ出た。

突然目の前がパッと明るくなり、空中に一人の老人が出現、悟空にあいさつした。

「大聖、なに故ここに？」

悟空は哀れっぽくそのわけを話した。老人は、

現在の読書人はみな小月王出身だ。
「おまえさんはここが青青世界の小月王が建てた宮殿の中だとは知らんだ。あいつはもともと読書人の出身、国王となってからは、一日中風流三昧、十三経²²になぞらえた十三宮を造営した。ここは六十四卦宮〔易経宮〕だ。おまえさんは一時的に頭が混乱し、まんまと困の中の困・葛

18 意外なものが自らを縛ってしまう、という発想は、董説が書いた「夢本草」（『豊草菴前集』卷三茗文編）という文章にも見える。「禪は人の縛めを解かんと欲するも、今の禪者は禪に縛らる。亦た猶お世人の夢を言うに、吉凶の諸想を持する者の、夢に縛らるるがごときのみ。」ここでは人の心を解放するために行う禪の修行が逆に人の心を縛ってしまうことを言っている。

19 鋭利な剣 原文は「青鋒剣」。『記』第五十九回で、孫悟空と羅刹女が闘う場面を歌った詩に、「這箇金箍の鐵棒は多だ凶猛にして、那箇霜刃の青鋒は甚だ緊闘し」とある。

20 剣匣 李賀の「崇義里滯雨」詩に、「憂眠 劍匣を枕にし、客帳 封侯を夢む」とあるとおり、剣を収納しておく箱。「劍函」とも称する。

21 苦難 原文は「苦楚」。『北齊書』卷三十崔昂傳に、「嚴猛を尚び、好みて鞭撻を行う。苦楚萬端と雖も、これに對して自若たり」とある。

22 儒教の古典十三種。具体的には、『易経』『書経』『詩経』『周禮』『儀禮』『禮記』『春秋左氏傳』『春秋公羊傳』『春秋穀梁傳』『論語』『孝經』『爾雅』『孟子』を指す。宋代に選定された。

藟宮²³の中へと入り込み、縛り上げられてしまった。わしが赤い線をほどこき、おまえさんを解き放ってお師匠様を探しに行かせてやろう」

悟空は目に涙をためて、

「もし長老にそうして頂けたら、感謝に堪えません」

老人はただちに手で一本一本赤い糸をひきちぎった。悟空は抜け出すや否や最敬礼²⁴、「長老のお名前は？お釈迦様にお会いした時に、長老の大手柄も記録して頂きます」

「大聖、わたしは孫悟空と言います」

「おれも孫悟空、おまえも孫悟空。一冊の功勞簿にどうして二人の孫悟空の名があろうか。おまえさんこそこれまでどんなことをやらかして来たか話してみなさい。おれが少しは覚えてりゃまだしもだ」

「もしわしのやらかした事をた聞いたらきつとすくみあがるぞ！五百年前、わしは天宮を奪い取り腰を落ち着けようとした。玉帝が任命したのは弼馬温。はてまた齊天大聖たあおれのことよ。五行山の下で苦しみ苦しみ、苦しみ苦しみ、苦しみぬいたあげくの果てに唐僧がやって来てきとりのみち正果に従うこととなった。西天への道すがら災難に遭遇、偶々青青世界に逃げ込んだ」

悟空は激怒、「この六耳獼猴²⁵のゴロツキめ、またおれをからかいに来おったか。棒を喰らえ！」

耳から金箍棒を取り出すと、真正面から打ち下ろした。老人は袖をくるとはらって、大喝一番、

「これは身内²⁶が身内を救うというもの、惜しむらくはお前は虚妄を真実、真実を虚妄と考えておる」

突然一筋の金色の光が目の中に飛び込み、老人の姿は即時に消えてし

察するに、他人には救えない事だったのだ。

23 「藟藟^{かづり}」はいずれも蔓草で、くずとかずら。「易經」の困卦の上六(じょうりく)「藟藟^{かづり}に艱^{げん}應に困しむ。曰に動けば悔ゆ。悔いあれば征きて吉なり」とあり、「困の中の困」「藟藟宮」などすべて『易經』に由来する。また藟藟=蔓草=赤い欄干にまといつかれることにより苦しむわけであるから、第十回の内容とも完全に符合する。

24 原文は「唱箇大喏」。『水滸傳』第十二回に、「楊志轉過廳前、唱箇大喏」（楊志は演武場に進み出ると、最敬礼をしました）とある。

25 悟空と同格の化け物ザル。『記』五十七～五十八。

26 原文は「自家人」。『醒世恒言』第六卷に、「原來是自家人。老漢一向也避在郷村、到此不上一一年。」(なんとあなたは身内でしたか。私もずっと田舎に身を隠しておりました。ここにやってきて一年にもなりません)とある。

まった。悟空はようやく今のは自分の真神²⁷が出現したのだと悟った。
あわてて丁寧に一礼、自分に感謝したのだった。

(評) 心を救わんとするの心は、心外の心なり。心外に心有るは、正
に是れ妄心なり。如何^{いか}にしてか真心を救い得ん。蓋し行者は情魔^{こくう}に
迷惑^{まどわ}され、心已^{まよ}に妄えり。真心は却って自ら明白なり、妄心を救う者
は、正に是れ真心なり。

27 真神 迷妄・俗塵に覆われ日常は隠れている真心。『雲笈七籤』卷四十三存思三洞法に、「子能
くこれを行わば、真神形^{あらわ}を見さん」また同書卷十七洞玄靈寶定觀經にも、「真神道^{きみ}に契う、故に
至人と曰う」とある。

第十一回

節卦宮門に帳目を看
愁峰頂上に毫毛を抖く

悟空は感謝の言葉を述べ終わりと、楼から跳び降りると、また別の門にやって来た。

門の上¹には「節卦宮」という大きな三文字を彫った石板が掲げられ、門の横木に掛けた金色の繩くみひもに、碧玉に彫りこんだ節の卦が吊り下げられている。二枚の門扉のうち、一枚には水の紋様が、一枚には沼沢が描かれて²いる。門扉の両側には雲浪模様の箋紙に書かれた一对の春聯が掛けられており、そこには、

門を出でず、戸を出でず、険なる地険なる天。

少女と為り、口舌と為り、節は甘く節は苦し³。

[門から出ないし、部屋の扉からも出ない、それは天にも地にも危険があるから。少女となったり、ケンカとなったり、節の卦は楽しい結果をもたらしたり苦しい結果をもたらしたりする]

着眼点。

悟空は読み終わり、すぐに入っていこうとしたが、ふと足を止め、ちょっと考えてから言った、

「青青世界には人を縛る例の赤い糸がある、むやみやたらに行動することはできんぞ。門の前やら後ろやらをざっと見て、様子を探ってから、老和尚を探し出せばいいや」

この辺りは
広大無辺の
青青世界を
叙述してい
る。

堀に沿って門を通り過ぎて東側に廻ると、斜めに傾いた堀の上一枚の紙が張られ、そこには節卦宮の大工・石工・種々の職人の手間賃の総計が書いてあった。

- 1 原文は「門額」。唐代李復言『續玄怪錄』卷二張質に、同姓同名の悪人と間違えられた張質が、冥府に召喚される場面に、「直北に大府の門有り、門額に題して地府と曰う。」とある。
- 2 枚には水の紋様が、一枚には沼沢が描かれ 節の卦は上が☱坎、下が☵兌から成り、それぞれ「坎は水と爲す」「兌は澤と爲す」（『易經』説卦傳）と説明されているのに基づく表現。
- 3 この対句はすべて『易經』の節の卦に基づく。「門を出でず、戸を出でず」は節の初九に「戸庭を出でず、咎なし」、九二に「門庭を出でず、凶なり」とあるのに基づく。「険なる地険なる天」は、象傳に「説びて以て険に行き、位に當って以て節し、中正にして以て通ず。天地節して四時なる」に基づく。「少女と爲り、口舌と爲り」は、説卦傳で節の下半分兌☱を説明する部分で、「兌は澤と爲り、少女と爲り、巫と爲り、口舌と爲り、毀折と爲り、付決と爲る」に基づく。「節は甘く節は苦し」は節の九五に「甘節す。吉なり。往けば尚ばるることあり」、上六に「苦節す。貞なるときは凶。悔ゆるときは亡ぶ」とあるのに基づく。

節卦正宮の建物大小六十四室。

大工の賃銀一万六千両、石工賃銀一万八千零一両、種々の職人は五万四千零六十両七錢ちよっさり。

節の乾^④に之く宮六十四室^④。

話の持ってい
き方が最高に
うまい。三藏
に言及しない
ところがポイ
ント。

ここで先ず
翠繩嬢を持
ち出す。

一昨日、小月王の義兄弟、三四十歳でまだ元服せず^⑤、まだ身を固めぬので、小月王が翠繩嬢という妻をさがしてやり、第三宮殿で祝言を上げた^⑥。その初夜、突然口ゲンカを始め、小月王はカンカンになり、わたしを呼びつけ五十叩きの重罰を喰わせた。私がこんなひどい目にあつたのは、職人どものせいだ。今職人どもの賃銀をそれぞれ六倍に減らし^⑦、うっぷんを晴らしてくれよう。大工には五万両だけ、石工は四万両だけ、種々の職人は二十万両ちよっさり。

節の坤^⑤に之く宮六十四室

大工・石工・種々の職人は前の通り。

節の泰^⑥に之く宮白鶴屋四百六室

小月王は芰荷小舎だけを気に入り、職人たちの手間賃を増やし、各人五百両を加えてやった。大工は銀七百万両、石工は銀六百六十四両、種々の職人は銀二百万八千両きっかり。

節の否^⑦に之く宮 小月王の寢室一万五千室の空青屋^⑧。

4 乾以下、坤・泰・否みな六十四卦の一つである。

5 まだ元服せず 原文は「還不上頭」。「上頭」の用例としては『南齊書』卷五十五孝義傳に「華寶、晉陵無錫の人なり。父豪、義熙の末長安に成さる。別れに臨みて寶に謂いて曰く、我の還るを須ちて、當に汝が上頭を爲さん」がある。

6 原文は「做親」。『醒世恒言』第八卷に、「若大官人病體初痊、恐未可做親。不如再停幾時、等大官人身子健旺、另揀日罷。」（もし旦那さまが病み上がりならば、婚姻はまずいでしよう。婚儀は延期して旦那様が元氣になられてから、またあらためて日時を定めましょう）とある。

7 今職人どもの賃銀をそれぞれ六倍に減らし 原文は「今除衆匠價銀各六倍」。「六倍」という普通は使わない表現をここで用いたのは、わざとナンセンスな効果をねらったものであろう。

8 空青には青空と顔料になる鉱石の二つの解釈が可能である。青緑色に塗られた建物群と解するのがいいかもしれない。後者を扱った作品としては江淹の「空青賦」がある。

万鏡楼を
持ち出した
ところが
絶妙。

小月王は鏡楼を一つ増やそうとしている。というのも近いうちにさらに世界をいくつか作り出すつもりなので。頭風世界^{ずふう}⁹から、時文世界¹⁰と称する世界を分割、菁菜世界の中から紅粧世界を分割、蓮花世界の中から焚書世界を分割した。その他分割した小世界は書ききれないほど、困の中の困万鏡楼には納まりきらず、さらにここに一棟の第二万鏡楼を新築せざるを得なくなった。明日各々の職人は工事を開始せよ。みな慎重にやれ、粗相をして¹¹罪とがをこうむらぬように。まずこれまでの手間賃を支給する。大工五百万五千両、石工四千万両、種々の職人一百八十万両八錢五分一厘ちょうど。

悟空は目が疲れてしまい、残りの六十宮は懷素式早見法¹²を使って一目で見終わった。

悟空は見終わると、空恐ろしくなり、

「おれさまは天宮も蓬莱山も見たが、こんな六十四卦宮なんて一度も見ることがない。六十四卦で不足を感じ、一卦の中にさらに六十四卦がある。六十四個の六十四卦で不足を感じ、一卦の中にさらに六十四卦がある¹³。こういうところが、一か所に止まらず、このほかにまだ十二あるのか¹⁴。ほんと現実では出会えぬし、夢の中の奇遇だ。」

即座に計略をめぐらし、体からひとつかみの体毛を抜いて口に含み、

9 『三國志』卷二十一魏志陳琳傳裴松之注に引く『典略』に、「太祖は先に頭風に苦しむ、是の日疾發し、臥して琳の作る所を讀むに、翕然として起ちて曰く、此れ我が病を愈すと」とあり、頭痛を指す。

10 「時文」には、「當時の文明」、「當時の文章」、「當時流行した文章」などいくつかの意味があるが、おそらく三番目の範疇に属する明清時代の八股文を指すであろう。『警世通言』第十八卷に、「若是三家村一個小孩子、粗粗裏記得幾篇爛舊時文、遇了個盲試官、亂圈亂點、睡夢裏偷得個進士到手」（もし村塾に通う子供が何篇かの古くさい八股文を暗記し、無知な試験官に当たって、でたらめな採点をしてくれれば、居眠りしてる間に進士が手に入ってしまう）とある。

11 粗相をして 原文は「唐突」。『後漢書』卷七十孔融傳に、孔融がみなりにかまわず、頭巾もつけずに「宮掖に唐突した」とあるのが、古い用例である。そのほか近代小説では、『古今小説』第十二卷に、「張説奏道、「此襄陽詩人孟浩然、臣之故友。偶然來此、因布衣、不敢唐突聖駕。」（張説は皇帝に、「これは襄陽の詩人孟浩然で、私の旧友です。たまたまここにやって来ただけで、身分は布衣ですので、皇帝陛下に粗相はできません。」と申し上げた）という用例がある。

12 懷素式早見法 懷素は唐代の僧・書家で草書に巧みであった。第四回で悟空が「帶草看法」（草書の書体のようにざっと見るやり方）で百万枚の鏡を見渡したのと同工異曲の表現。

13 六十四の三乗で二十六万二千四百四十四という途方もない数字になる。

14 十三經から易經を除くとあと十二經なのでこう言う。

粉々になるまで噛み砕き、「変われ」と叫ぶと、無数の孫悟空に変わり、せわしなげに立ち歩き動き回る。悟空は体毛製の悟空に、「面白そうなところでくわしたら、足を止めてちょっと見るだけにして、すぐに帰って知らせろ、そこにぐずぐず留まっていたはいかん」と言いつけた。

体毛製の悟空の一群は、飛び跳ねるものあり、踊り廻るものあり、あつというまにてんでんばらばらの方向に走り去った。

悟空は体毛製の悟空を出動させると、自分はぶらぶら歩くうちに、偶然愁峰頂という峠にやって来た。

頭をもたげて見ると、一人のボーイ¹⁵が一通の書状を手にし、歩きながら、ぶつくさ言っている、

「チェッ、うちの親方¹⁶はふざけてる。帝王のお家¹⁷の大事が、てめえ一人とどう関係するのか知らねえが、よけいな疑問を抱き、書状なんぞ持って王四老人の所まで行かせやがる。ほかの日ならまだしも、今日は午後¹⁸から陳先生¹⁹がうちの飲虹台²⁰で芝居見ながら²¹酒を飲まれるのに、てめえのこんなつまらぬ用事のために、おいらは芝居一つ見られねえ」

悟空はお師匠様が飲虹台にいると聞いて、瞬時にそこへ探しに行こう

15 原文は「小童」。杜甫の「與李十二白尋范十隱居」詩に、「門に入りて高興發し、侍立する小童は清し」とある。

16 親方 原文は「作頭」。用例には、『初刻拍案驚奇』巻十三に、「(趙)六郎噙着眼泪、怎敢再説、只得出門到李作頭家去了。」(趙六郎は涙を眼にためましたが、言いかえすこともできず、(棺材屋の)李親方のところへ行くほかありませんでした)とある。

17 帝王のお家 原文は「天家」。『魏書』巻二十一上の咸陽王禧傳に、「禧聞きて歎じて曰く、我れ心に負かざるに、天家豈に應に此の如くなるべけんやと」とある。

18 午後 原文は「下晝」。『初刻拍案驚奇』巻十一に、「周四道、「下晝時節、是有一箇湖州姓呂的客人、叫我的船過渡。」(周四が「午後に湖州の姓は呂という客がやって来て川向うへ渡してくれと言いました」と言った)とあり、王古魯の注に、「呉語では、「上午」を「上晝」、「下午」を「下晝」と言う」とある。

19 三藏法師を指す。三藏法師の俗名が「陳光蕊」であることからこう呼んだ。

20 飲虹台 「飲虹」は水を飲む虹。『漢書』巻六十三の燕刺王劉旦傳で、宮殿にかかった虹が井戸の水を飲み尽くしたという伝説に基づく。「是の時、天雨ふり、虹宮中に屬^{そく}き、井水を飲んで竭く。」「飲虹」の用例としては王褒の「玄圃溶池 泛に臨みて和し奉る」詩の、「石壁 明鏡の如く、飛橋 飲虹に類す」がある。

21 芝居見ながら 原文は「搬戲」。『金瓶梅詞話』第六十四回に、「當日衆人坐到三更時分、搬戲已完、方起身各散」(その日みんなは三更まで居続け、芝居がはねてからやっと帰途に就いた)という用例がある。

としたが、ひょいと考え直し、

「万一あちこち歩き回って道をまちがえたらかなわない。それよりあの
ポーイ²²に一声尋ねてみる方がいい」

そこで、「若旦那」²³と呼びかけた。

ところがなんと、その小者は独り言をつぶやきながら歩いており、一
度も顔を上げて悟空を見なかったので、突然悟空に出くわすと、ぶった
まげて体の七つの穴から血を流し²⁴、倒れて気を失った。

悟空は笑いながら、

「いい子、いい子。おまえ死んだ振りが上手だね。さてやっこさんが持つ
てるのはどんな書状なのか一つ見てやろう」

急いで取り出し、開いて見ると、二枚の黄色いざら紙にこう書いてあっ
た。

管十三宮総作頭沈敬南 字を奉る

王四老官臺下知悉²⁵。不肖は

臺下の暖目を承け、提拔²⁶され其の作頭と做るも、曾て賊頭賊腦²⁷と
臺下を累わして抱悶せたるを曉得ず。況や不肖は名頭²⁸も修潔²⁹たら
んと要る者なり。故に數年來動作³⁰いて静然なりしか。昨日兪作頭、

22 ポーイ 原文は「童兒」。「兒童」をひっくり返したもの。『漢書』卷六十五東方朔傳贊に、「朔の詭譎、逢占射覆、其の事浮淺にして、衆庶に行われ、童兒牧豎、眩耀せざる莫し」とある。

23 若旦那 原文は「小官人」。『醒世恒言』第二十七卷に、「小官人、客店離此尚遠。你既行走不動、且坐在此、待我先去放下包裹、然後來背你去、何如？」（若旦那、旅館はまだ遠いです。あなたが動けないなら、しばらくここに坐っていて下さい。私が先行して荷物を置いてから、あなたを背負って行きましょう、いかがですか？）

24 体の七つの穴から血を流し 原文は「七竅紅流」。『記』三十三回に、「那大聖力軟筋麻、遭逢他這泰山下頂之法、只壓得三尸神昨、七竅噴紅。」（かの齊天大聖も、力が抜けてぐんにやりとなり、こやつ（銀角）の泰山下頂の法にあっては、三尸神も裂け、七つの穴から血を噴き出しました）

25 「知悉」は上級の者が下級の者に対して「知悉」（しらしめる）、という具合に使われる語彙で、ここに使うのは些かまづいように思われる。用例としては、『警世通言』第四卷に、「江居領命、并曉諭水手知悉。」（執事の江居は命を受けると、水夫たちにその旨申し渡し、知らしめました）とある。

26 袁宏『後漢紀』卷二十三靈帝紀上に、「（郭泰）其の無聞の中に在るを提拔する所、陳元龍、何伯求などの若き、終に秀異と成る者六十餘人」とある。

27 もとは「賊頭鼠腦」。『記』第三十一回に、「八戒道、哥啊、我曉得。你賊頭鼠腦的、一定又變作個甚麼東西兒、跟着我聽的」（八戒は言った、兄貴、あんたはきっとこそこそ何かに変化して私にくっついて来て盗み聞きをしていたのだろう）とある。

28 「初刻拍案驚奇」卷之三に、「劉東山夸技順城門、十八兒奇踪肆肆」に、「一生好漢名頭、到今日弄壞」（これまでの好漢としての名声を、今日地に落とすことになった）とある。

29 『韓非子』八説篇に、「人君の在る所、辯智に非ざれば則ち修潔なり。」とある。

とつぜん 忽然不肖に見いて之く言えり。かれ い 他は説う、六十四卦宮・三百篇宮³¹・
 十八章宮³²にて物件³³の闕せしこと、其計で百余り。

小月王殿下は大いに怒り、明日王四老人を差わし、宮逐に査點させんと
 要。不肖思うに

臺下は片の慈心を有つ者なり、囑せずと雖も必然照顧せられんのみ。猶
 お恐らくは此の心白あげずば、冤を百年に蒙らん。

もし

臺下其の始終³⁴を善してくださるならば、則ち感佩して身を終うる者な
 らん。

眷^{めをかけて}いただいてる侍教・門生・十三宮總作頭沈敬南百拜

王四老官老阿爹老先生大人即ち案元³⁵

[十三宮造営管理総支配人沈敬南、手紙を奉ります。王四老官人様ご覧
 下さい。私はあなた様のお引き立を受け、抜擢されて支配人になりま
 したが、これまで隠れてこそこそ策動しあなた様を悩ませたことはない
 かと存じます。しかも私は名声も汚したくないと思っている者です。で
 すから、ここ数年目立たぬように振舞ってまいりました。昨日兪棟梁
 が突然私に会いに来てこう言いました。「六十四卦宮と三百篇宮そして
 十八章宮でものがなくなり、その総計は百余りとか。小月王殿下は激怒
 され、明日王四老官人様を派遣して一つ一つの宮ごとに点検させよう
 としている」とのこと。私思いますに、あなた様は慈悲深いお方、私の
 方からお願いしなくとも必ず私に配慮して下さるはず。ただ、この事を
 申し上げなければ、百年にわたる冤罪を被ることになりましょう。目を

30 動作 『春秋左氏傳』襄公三十一年に、規範とすべき君子を、「故に君子位に在りては畏る可く、
 …聲氣は楽しむ可く、動作に文有り、言語に章有り。以て其の下に臨まば、これを威儀有りと謂
 うなり」と定義するのに基づく。

31 『詩経』は孔子の編纂を経て「三百篇」となったので、こう言う。『論語』爲政第二に、「詩
 三百、一言以てこれを蔽う、曰く思い邪なし」とある。

32 『孝経』は十八章なのでこう言う。

33 物件 用例としては『記』十六回に、「三藏見了、夸愛不盡道、「好物件、好物件、真是美食美
 器。」(三藏はそれを見ると大いに誉めそやしました、「けっこうなものですね、けっこうなもの
 ですね。ほんとに美食に美器です)」とある。

34 最初から最後まで。『後漢書』卷十上皇后紀明德馬皇后に、「寵敬日びに隆に、始終衰うる無し。」

35 案元 普通は「案首」という。府・州・県における科挙地方試験の首席合格者。『警世通言』
 第十八巻に、「那案首不是別人、正是那五十七歳怪物、笑具、名叫鮮于同」(その首席合格者はほ
 かでもない、あの五十七歳の怪物で、物笑いの種、名は鮮于同その人でした)とある。

掛けていただいている後輩・弟子・十三宮造管管理総支配人沈敬南拜、
王四老官人父上老先生大人即ち案元]

悟空はお師匠様を探したい一心、読み終わると、すぐ身震いして、体毛製の悟空を呼びもどした。体毛製の悟空が一人、ふもとから山頂まで飛ぶように駆け上がってきて、

「大聖さま、大聖さま、駆けもどって参りました。随分お探しいたしました」

と叫んだ。悟空は、

「おまえは何を見てきた？」

「わたしはある一つの洞天³⁶まで行き、白鹿がしゃべるのを見ました」

するとすぐにまた体毛製悟空が二人、髪の毛を引っ張るやら、耳たぶを引っ張るやらして、山を上がって来て、悟空に向かい、一斉に跪いた。こっちの体毛製悟空が、

「あっちの体毛製悟空は碧桃³⁷を一個よけいに食べました」

と言うと、あっちの体毛製悟空がまた、

「こっちの体毛製悟空は、梅の木の実を一個多く摘み取りました」

と報告した。

悟空がどなりつけると、三人の体毛製悟空はいっしょに跳ね上がって悟空の体にもどった。しばらくしてまた体毛製悟空が一人となり、東北の方角からもどって来た。

きれいでした、と言うのもあり、きれいじゃなかった、と言うのもあり、また壁の上に二行の文字、「意は流水に従って行き、却って青山に向いて住まる。落花の空しきを見るに因り、^{はじ}方めて春の歸り去るを悟る」³⁸が書かれているのを見ました、と言うのもあり、一枝の繡毬^{あじさい}³⁹の葉ごとに仙人が一人立ち、漁板⁴⁰を手にし、声高らかに、

36 神仙の住む別天地、三十六洞天などとも言う。景勝の地をも指す。

37 韓偓の「荔枝」詩之一に、「漢武の碧桃 争でか比し得ん、枉さら方朔をして儉兒と號さしむ」とあるのによつてすれば、漢武帝が西王母にもらった仙桃を指すこととなり、悟空の仙界における蟠桃盗み食いの一件の連想が働いていることとなる。

38 *明代宋廉の『文憲集』卷三十一「題亭上壁三首」其の一に「意は流水に隨いて行き、却って青山に向いて住まる。落花の空しきを見るに因り、方めて春の歸り去るを悟る」とあるのをそのまま使った。

39 元稹「六年春遣懷」詩之七に、「童稚は癡狂にして^{みだ}撩亂れて走り、繡毬の花は仗る滿堂の前」とある。

「我を物・我無きに還せ、我を我・物無きに還せ。虚空 主人と作らば、
物・我は皆客為り」⁴¹

と独唱していました、と言うのもあり、一人の体毛製悟空が、

「ある洞天の中の雲は、たいがい渦巻き模様の錦でした」

と言い、一人の体毛製悟空が、

「ある高樓はたいがい沈香で作られていました」

と言い、一人の体毛製悟空が、

「一つの古莫⁴²洞天は、門が閉まって入れません」

と言い、一人の体毛製悟空が、

緑竹洞天の
伏線。

「緑竹洞天は、真っ暗闇で入っていくのもよかったです」

と言った。

悟空は聞く気もなく、体を一ひねりすると、百千万人の体毛製悟空が一斉にパパパッと跳ね上がって体にもどった。悟空がすぐ大またに歩き出すと、すでにもどった体毛製悟空が、

「大聖、行っちゃだめです。まだ帰って来ない仲間が一人います」

と叫んだ。

悟空が立ち止まった途端、見ると西南の方角から一人の体毛製悟空が、ぐでんぐでんに酔っ払って山を上がって来た。悟空が、

「どこへ行って来た？」

と尋ねると、体毛製悟空は、

「わたしが一軒の高樓の近くまで来ますと、樓の中の娘、年の頃はちょうど二八^{じゅうはち}、顔は桃の花そっくり、わたしが窓の外にいるのを見て、むんずとばかり部屋の中へ引っ張り込み、二人並んで坐り、わたしが泥酔す

40 二枚の竹の板をつないだ打楽器。『梅磡詩話』巻中（『歴代詩話續編』所取）に、「陳起、宗之、杭州人。書を鬻いで以て自給す。唐宋以來諸家の詩を刊して、頗る詳備す。亦た芸居吟稿有りて板行す、芸居は其の自號なり。集中に夜西湖を過ぎる詩一絶有りて云う、鶴巢 猶お掛かる三更の月、漁板驚回す一片の鷗と」とある。

41 偈にも似たこの詩句は、皎然『詩式』に引く「道情詩」と題された王梵志の作品を踏まえるであろう。「我 昔 未生の時、冥冥として知る所無し。天公強いて我を生み、我を生みて復た何をか爲さんとするや。衣無くして寒からしめ、食無くして我をして飢えしむ。你天公に我を還さん、我を未生の時に還せ。」「未生の時」とは「物・我無き」時、「我・物無き」時の言い換えである。さらに推測を加えれば、この詩あるいは偈は、早く本の時空に戻りたいという悟空の内心を代弁しているのかもしれない。

42 古莫 美麗無比の意味であろう。杜甫の「戲題畫山水圖歌」の「尤も遠勢に工みにして古より比する莫く、咫尺 應須に萬里を論ずべし」などの句から発想して造語したのではないか。

るまで酒を飲ませました」

悟空は激怒、こぶしを固め、体毛製悟空を無茶苦茶にぶん殴るは罵るは、

着眼点。 「このろくでなし、ちょっと野放しにしたら、すぐに情の妖魔にまとわりつかれちまう」

その体毛製悟空は、オイオイ泣きわめきながらも、仕方なく跳ね上がって体にもどった。

悟空は体毛をすべて収め終わると、愁峰を下りたのだった。

（評）放心⁴³を回収しようとするこの書物の大きなテーマが、ここに流露しているのだ。

43 放心 「西遊補答問」に引く、『孟子』告子上の言葉、「學問の道は他無し、其の放心を求むるのみ」を参照。この評は様々な世界を彷徨する悟空の「放心^{うしなわれ}」を悟空の体からあちこちへ散って行った「毫毛行者」（体毛製の悟空）に見立てているのだろう。

第十二回

関雎殿に唐僧は涙を墮し
琵琶を撥く季女¹は彈詞す

悟空はずんずん歩いて、一座の楼台に到着、明々白々に飲虹台なのだ
が、お師匠様は見当たらない。悟空はいよいよいらついたが、ふと振り
向くと、見渡す限りの水面、真ん中に水殿が一つ、殿中に方巾²をかぶっ
た人が二人坐っている。悟空は少し疑惑を抱き、あわてて楼に隣接する
山の上に飛び上がり、とある窟み³に身を伏せ、仔細に観察した。見え
ば殿上に美しい青色の文字が四つ。

関雎水殿⁴

まことに「錦にまがう牆は績を列ね、繡にまがう地は文を成し、桂
の棟に蘭の粉、梅の梁に蕙の閣⁵」と古語にある通りの様子だ。殿のま
わりはすべて珊瑚を組んだ欄干で、年月がたち、とくに碧藍の水苔が
ついていて、まるで蟲篆⁶みみたいである。殿内のご兩人、一人は九花太
華巾をかぶり、一人は当世風の洞庭巾をかぶっていた。その九華巾⁷を
かぶった方は、色白で赤い唇、清々しい眉に真っ白な齒、三蔵に生き写
しで、頭巾だけが余計である。悟空は驚くやら喜ぶやら、「あの九華巾
の方は明らかにお師匠様だ。なんで頭巾なんかかぶってるんだ」と思う

ここでようやく
三蔵に会え
たが、またも
や本物の師父
ではなかった。
言葉につまっ
てしまう。

- 1 『詩経』召南采蘋に、「誰か其れこれを戸る、齊める季女有り」とあり、この回が関雎水殿を舞台にしているので、その連想から「季女」という言葉を使っている。
- 2 明代の文人がかぶった四角い帽子。『三才圖繪』衣服卷一に、「方巾、此れ即ち古の所謂角巾なり。制は雲巾と同じけれども、特だ雲文を少く。相い傳う、國初に此れを服するは四方平定の意を取る」とあり、少なくとも和尚のかぶりものでないことはまちがいない。
- 3 原文は「山凹」。山上の平地。『水滸傳』第四十三回に、「正走之間、只見遠遠地山凹裏露出兩間草屋。」(歩いているうち、ふと見ると遠くの山の窟みから二軒の藁ぶきの家が姿を見せていました)。
- 4 「関雎」は『詩経』冒頭の篇名である。おそらく周南の「關雎」は「關關雎鳩、在河之洲」(關關たる雎鳩は、河の洲に在り)と水にかかわりある詩句なので、水殿の名としたのである。『古列女傳』(四部叢刊本)卷四楚昭貞姜の条に、漸臺なる建物が出てくる。齊侯の娘で楚の昭王の夫人貞姜は王とともに外出し、河に張り出した建物の漸臺に遊んだ。王が他へ行っている間に河が増水したため、王は使者をやって退避させようとしたが、割符を持たせるのを忘れた。貞姜は割符を持たぬ使者の要請に応ずるわけにはいかないと、使者をつきかえした。使者が割符を取りに行っている間に漸臺は崩壊し、貞姜は水死したという。『列女傳』には挿絵があり、水殿のイメージをふくらませて頂きたい。水殿の挿絵は『補』第十二回の末尾の補注を見よ。
- 5 この描写は『藝文類聚』卷六十四齋に引く、江總「永陽三齋後山亭銘」の「錦牆は績を列ね、繡地は文を成し、吾が王は卓爾として、逸趣は羣せず、梅の梁に蕙の閣、桂の棟に蘭の粉」とほぼ同文である。

のだった。

他人を巻き
込もうとし
ている。

小月王を見ても、特に妖怪らしくもなく、あれこれと疑っては胸にしこりが生まれるのだった。今にも正体を現わして師匠を連れてずらかろうとしたが、また思い直し、

「お師匠様が万一邪心を起こしていたら、西天まで到達してもむだなこと」

やはりもとの通り山のくぼみに身を伏せ、目を凝らしてじっと見つめ、ただひたすらお師匠様の心の正邪を見分けようとした。

ふと見れば、下の方にいる洞庭中の人物が三蔵に向って、

「夕焼けがほんとに見事です、陳先生立ってぶらついて来ましょう」

九華巾をかぶった三蔵が、

「小月王、どうぞお先に」

と言ひ、二人は手をつないで、欲滴閣の上に登った。閣上には掛け軸⁸が何幅か、どれも有名人の書画である。かたわらに小さな箋紙が一枚、緑の字が書かれ、

青山^{くび} 頸を抱き⁹、白澗 心を穿つ。玉人^{かのじよ}¹⁰は何處ぞ、空天と白雲に。

[青い山は私の首をやさしく抱きかかえ、白いせせらぎは私の心に沁み入って来る。彼女はどこに居るのか、青空と白い雲のかあなたに。]

二人がしばらくぶらつくうち、竹林の中からかすかに声が聞こえてきた。頭巾をかぶった三蔵が、欄干にもたれかかって耳を傾けると、ちょうど一陣の松風に乗って言葉が届いて来た。それはこんな歌だった、

- 6 古代の書体の一つで、軍令を伝える旗に使用された。『陳書』卷三十顧野王傳に、「長じて遍く經史を觀て、精記嘿識し、天文地理、著龜占候、蟲篆奇字、通ぜざる所無し」とある。
- 7 *明代顧起元『客座贅語』卷一に、「南都の服飾は慶曆前に在りては猶お朴謹爲り、官は忠靜冠を戴せ、士は方巾を戴せるのみ。近年以來、殊形詭製、日に異なり月に新たなり。是において、士大夫の戴る所、其の名は甚だ夥しく、漢巾、晉巾、唐巾、諸葛巾、純陽巾、東坡巾、陽明巾、九華巾、玉臺巾、遺通巾、紗帽巾、華陽巾、四開巾、勇巾有り」とある。
- 8 原文は「單條」、單幅の掛け軸をこう言う。時代は後になるが、孔尚任の『桃花扇』第二十四齣罵筵に、「淨〔馬士英〕看壁介、這壁上單條、想是周昉雪圖了。」（淨、壁を見るしぐさをしながら、「この壁にかかっている掛け軸は、周昉の雪図だろうな」とある。
- 9 『三國志』卷二十五魏書の辛毗傳に引く『世語』に、「初め、文帝 陳思王と太子と爲るを争う。既にして文帝立つを得て、毘の頸を抱きて喜びて曰く、辛君我が喜びを知るや不^{いな}や」とある。
- 10 「玉人」は宝玉の如き美男美女を指す。元稹の「鶯鶯傳」に、「其の詞に曰く、月を待つ西廂の下、風を迎えて戸は半ば開く。牆を拂いて花影動く、疑うらくは玉人の來るか」とあり、『西廂記』にも同じ句があることは言うまでもない。

もの寂しく
なよなよし
た雰囲気
文面に現れ
ている。要
するに、男
は情の根を
断ち切れぬ
と、悲愁の
二字に行き
着いてしま
う。

月子は彎彎として幾州を照らす、幾家の歡樂 幾家の愁い。幾人か
玉の墜・金の鈎の帳に在る¹¹、幾個か瀟湘夜雨の舟
姉兄は半夜裏に被頭を打る、爲何に郎は去るや、你留留まら勿るや。
若是明夜三更に郎が見え勿れば、剪り碎まん鴛鴦の浪の錦の裘自然
堂本¹²。

[三日月はいったいくつの州を照らすの？月光の下、いったい何
組の家族が幸せて、何組の家族が悲しむのか？いったい何人の美女
が、玉の房飾りがつき、金のフックでつるされた帳の中にいるのか？
夜雨ふる瀟湘には何艘の舟が浮かんでいるのか？ ねえさん真夜中
に布団カバーを作る、つくりながらつぶやくの「なぜにあなたは立
ち去った、あなたなぜ留まってくれなかった、もし明日真夜中にあ
なたが来なければ、わたしは鴛鴦と波の文様が入った皮衣を切り刻
もう」]

三蔵は聞き終わり、うなずきながら涙をこぼした。小月王は、
「陳先生は恐らく長らく故郷を離れているので、このような歌声が聞こ
えてくると悲しくなられたのであろう。挿青天楼へ弾詞¹³を聞きに行き
ましょう」

二人は一しきり話すと、欲滴閣から降りて来たが、ふと見えなくなった。
なぜ見えなくなったかと思いなさる？実は挿青天楼と関雎水殿とは
一千棟の建物を隔てていて、眺め渡すと、至るところ咲き誇る花が軒を
とりまき、翠の柱が道筋を分け、垂柳は一万本、高桐は百尺といった有
様。二人はその中の曲がりくねった小道を歩いており、悟空が向い側の
窪地にいて、どうして見える道理があろうか。

一時もしてから、ふと見ると一棟の高楼の上に、あいかわらず九華

11 この歌は南宋に起源を持ち、その後様々なバリエーションが生まれたいちのつである。たと
えば馮夢龍『山歌』巻五雜歌四句にも「月子彎彎」が収められている。歌辞は「月子彎彎 九州
を照らす、幾家の歡樂 幾家の愁い。幾家の夫婦羅帳を同にし、幾家 飄散して他州に在るや」
であり、『西遊補』とは少し異なっている。

12 この歌のスタイルは、馮夢龍『山歌』に収められた作品のスタイルによく似ている。詳しくは
大木康『馮夢龍『山歌』の研究 中国明代の通俗歌謡』勁草書房2003年）参照。

13 琵琶や月琴伴奏の語り物。三～四人が演じる歌と語りから構成される。蘇州彈詞・揚州彈詞な
どが有名である。田汝成『西湖遊覽志餘』熙朝樂事に、「郡人の潮を觀るは、八月十一日自り始
めと爲し、十八日に到りて最も盛んなり。…其の時、優人の百戲、擊毬關撲、魚鼓彈詞、聲音は
鼎沸す」とある。

巾をかぶった三蔵と洞庭巾をかぶった小月王が、二脚しやうぎの交椅14に向かいあつて坐っており、碧糸紋様の壺きゆうずが一つ、茶がなみなみと入っていて、漢代風の方形茶碗が二つ並べられている。低い石の腰掛けには、彼らの他に盲いた若い女が三人坐っており15、一人は隔牆花みこしのはな16、一人は摸檀郎もたんとらう17、一人は背転娉婷みかえりびじん18と呼ばれている。みな盲人だがあふれんばかりの色香にあふれ、つややかな白玉の胸にそっと琵琶をあてている。

そこで小月王は隔牆花に、

「おまえは幾つ故事はなしが歌えるか？」

と言った。隔牆花は、

「王さま、「往者かこは苦多く、来者みらいは苦少なし」とか。故事はなしはたくさんありますが、ただ陳さまがどの話をお聴きになりたいかによります」

「陳さまはすごい通だから、まあ二つ三つ言ってみろ」

「古い故事はなしは申しますまい、新しいところだけを言いましょう。玉堂暖話、天別怨書19、西遊談…」

「西遊談とは目新しい、それでいこう、それでいこう」

娘は承知して、琵琶を弾き、ソプラノでせりふを合わせます。

詩20に曰く、

まさに夢の
中で夢を語る
喩えその
ものだ。悟
空はなお目
を覚まさない。

14 用例としては『朱子語類』卷七十七に、「如這交椅是器、可坐是交椅之理。」（この交椅が器とすれば、坐するという機能は交椅の理なのだ）とある。

15 原文は「無目女郎」。これはもちろん瞽女を指す。＊明代田藝蘅の『留青日札』卷二十一に、「瞎先生と曰う者は、雙目瞽たる女にして、即ち宋陌頭盲女の流なり。幼き自り小説、辭曲を學習し、琵琶を弾くを生よきまうと爲す。多くは美色有り、技藝に精しく、笑諺を善くし、人を動かす可き者なり。大家の婦女は驕奢の極みにして、以て日を度る無ければ、必ず此の輩を招致して、これを深院靜室に養い、晝夜狎集飲宴し、これを稱して先生と曰い、南唐の女冠歌先の若き者なり。淫詞穢語、人の聞耳を汗し、春心を引動し、多く門風を敗壞するを致す。今習いて以て俗と成り、恬として怪しむを知らず、甚だしきに至りては、家主も亦たこれを悦び、枕席に留薦して其の瞎たるを忘る。真に異事なり」。

16 この芸名のもとは、おそらく劉孝威の詩の「牆を隔てる花は半ば隠れ、猶お見る花枝の動くを」あたりに基づくであろう。

17 「檀郎」は西晋の美男子潘岳の字が「檀奴」だったので、後に男子の美称となった。温庭筠の「蘇小小歌」に、「一たび檀郎の便風を逐いて自り、門前の春水年年緑なり」とある。その「檀郎」を摸るといふわけで、「おとこあさり」ルビをふった。

18 「娉婷」は美しいさま、転じて美人の意味となる。唐代喬知之の「緑珠篇」に、「石家の金谷新聲を重んじ、明珠十斛もて娉婷を買う」とある。それが「背轉みかえり」つたわけなので、「みかえりびじん」とルビをふった。

19 天別怨書 劉本には「則天怨書」に作る。もしそうならば則天武后に関連する話かと思われるが未詳。

酌^のめや笙^{うた}歌えて晝堂を掩う莫かれ

暮年に初めて信ず夢中の長きを

如今や暗に心と相約す

静かに對^{わか}わん高齋^{いっぽん}の一炷の香

[飲めや歌えの大騒ぎで華麗な座敷をおおいつくしてはならない

晩年になって初めてこの人生が長い夢であることを信ずるようになった

今私は心の中で誓った、これからは書齋に立てた一本の線香に向かっ

て静かに物思いにふけることにしよう。]

隔^{みこしのはな}牆花はさらに二十七声のものさびしく悲しげな琵琶の調べをつまび

き、のびやかな歌声を響きわたらせた、

天皇²¹は那の日 星斗を開き

[そのころ天帝は星を輝かせはじめ]

九辰²² 五部²³ 乾坤を立つ

[九つの星と五行によって天地を立てた]

日を彈^い²⁴ 雲を尋ぬる²⁵は前代の蹟

[羿が日を射落とし雲をたずねたのは前代の出来事]

魚の雲²⁶ 珠の雨 百般の形

[魚の形の雲、真珠の形の雨と空は千變万化していた]

無懷氏²⁷の銀竹は奇節多く

20 この「詩」は唐人の作品を寄せ集めたいわゆる「集句」で、第一句は許渾の「宿松江驛」詩、第二句も許渾の「滄浪峽」詩、第三句は高駢の「寫懷」詩二首の二、第四句は曇域の「懷齊己」詩を使っている。韻脚も堂・長・香と下平七陽で合っている。＊湯顯祖の『邯鄲夢記』の「尾聲」はまさにこの四句であり、董説はそのまここに引用していることがわかる。

21 「天皇」が天皇・地皇・人皇の三皇の一人を指すのか、それとも天帝の別称である天を指すのかは不明。後者とすれば『後漢書』卷五十九張衡傳に引く「思玄賦」の「帝閭を叫(よ)びて扉を闢かしめ、天皇に瓊宮に覲う」(李賢注「天皇は、天帝なり」)をふまえる。

22 「九辰」は多数の星であることはまちがいないが、具体的に何を指すかは不明。

23 「五部」は『史記』卷二十六曆書「(黄帝は)清濁を定め五部を起こし」の集解によれば「五部、五行なり」。

24 「彈日」は「楚辭」天問の「羿は焉ぞ日を彈たる、鳥は焉ぞ羽を解きたる」にもとづく。

25 「尋雲」は『藝文類聚』卷五十二治政上善政に引く、北周の王褒「上庸公陸騰勒功碑」に、「高峯に雲を尋ね、深谷に景無し」とある。

26 「魚雲」の用例は『藝文類聚』卷四十一樂部一論樂に引く、梁の簡文帝「從軍行」に、「魚雲旗を望みて聚まり、竜沙 陣に隨いて開く」とある。

27 「無懷氏」は神話時代の帝王、理想的な政治を行ない人々は安楽にくらしたという。『管子』封禪篇に見える。陶淵明「五柳先生傳」にも「無懷氏の民か、葛天氏の民か」とある。

[無懷氏のころ生えたのは節の多い銀竹]
 葛天王²⁸の瑞葉は盡く香凝る
 [葛天氏の時茂ったのはよい香りのする瑞葉]
 龍蛇²⁹のごとき心畫³⁰は青板³¹に傳わり
 [青い石版に伝えられたのは龍蛇状の行書]
 烏兔³²の花書³³は玉氷³⁴に挂く
 [白い紙に書かれたのは月中の兔のような花押]
 山文³⁵ 石字³⁶ 俱に話す休かれ
 [山の石に刻まれた文字について語ってはならない]
 路叟³⁷ 嵩封³⁸ 且つ慢かに論ぜよ
 [嵩山に住む路傍の翁よ事情をゆっくり話してくれ]
 玉は西海³⁹に沉⁴⁰む 團華⁴¹の錦
 [屈原のような正義の臣も華やかな錦織に包まれて西海に沈み]

28 「葛天王」は「葛天氏」に同じ。やはり神話時代の帝王で、理想的な政治を行った。『呂氏春秋』古楽篇参照。陶淵明「五柳先生傳」にも見える。「瑞葉」は『芸文類聚』卷八十二草部下蒲に引く梁の元帝「賦得蒲生我池中」詩に「瑞葉 符苑に生ず」とある。

29 「龍蛇」は李白の「草書歌行」に「時時只だ見る龍蛇の走るを」とあるように、草書や行書などの字体を指す。

30 「心畫」は漢揚雄の「法言」問神篇に「故に言^{はなごころば}は心の声なり、書^{かごころば}は心の畫なり」と言うように文字を指す。

31 「青板」は「青簡」すなわち竹簡に同じか。『漢語大詞典』参照。

32 「烏兔」は晋の左思「呉都賦」に「烏兔を日月に籠む」とあり、また『顔氏家訓』第十六歸心に、「然らば日月も又た石と當さんか、石既に牢密なれば烏兔焉んぞ容れんや」とあることから、日と月に住む烏・兔の意となる。

33 「花書」は『石林燕語』卷四の「唐人初め未だ押字あらず、但だ草で其の名を書して以って私記と為す、故に花書と號す。草涉の五雲體是れなり」から、今で言う花押とわかる。

34 「玉氷」は楊萬里「謝趙茂甫惠浙書中筆蜀越薄牋」詩二首その一に「公子は平生長物無し、几研生涯 玉氷に敵う」とある。

35 この句全体が具体的に何を指すかは不明。「山文」の用例は、鮑照「三日遊南苑」詩に、「麗日山文を暉かす」がある。

36 「石字」の用例は、『陳書』卷二十七江總傳に引く「修心賦」に「大禹の金書を蘊み暴秦の石字を鏤る」がある。

37 「路叟」は『後漢書』卷五十七劉陶傳にその上表文を載せて、「民庶の謡吟を聞き、路叟の憂う所を問う」というのにもとづく。

38 「嵩封」は封禪の祭を受けた嵩山を指す。

39 「西海」もやはり『楚辭』離騷の「不周に路して左転し、西海を指して以って期と為す」による。

40 「玉沈」は『楚辭』九思の遭厄に「屈子の厄に遭いて、玉躬を湘汨に沈めしを悼む」とあるのによって、屈原のような「正しき臣」にも遇不遇あることをいうと解する。

41 「團華」は團花（円形紋様）と同じか。范成大の「露天峽角」詞に「少年は豪縦、袍錦 團花の鳳」とある。

寶璐⁴²庭中 正臣⁴³を賞す

[方正な臣下が時には宝玉のような宮殿で賞賜を受けることもある]

許由⁴⁴ 天子 龍袞より逃れ

[許由は天子の位を譲られたが皇帝の服から逃れ去り]

山河を虞舜の君に送り奉れり

[天下を有虞氏舜君に献上した]

十有四年にして鍾石の變ありて⁴⁵

[堯が在位十四年目に音楽を奏すると雷雨が降る変事が起こり]

洞庭の長者⁴⁶ 人民を掌どる

[洞庭の反乱を鎮圧した長者禹が人民を治めることになった]

桑林 曾て 成湯の拜する有り⁴⁷

[桑林で殷の湯王が雨乞いをして干ばつを止めた]

鹿臺⁴⁸ 珠袖 涙 續紛たり

[鹿台の宝物庫で暴君紂王は珠玉を飾った服をまもって泣く泣く焼身自殺]

雨旗 風鉞 清界を開き⁴⁹

[風雨の中 周武王は鉞で紂王の首を切って旗に懸け 新時代を開き]

42 「寶璐」は『楚辭』九章・涉江に「明月を被りて寶璐を佩ぶ」とある。

43 「正臣」の用例は『漢書』卷三十六劉向傳に「正臣の進むは、治の表なり。正臣の陥れらるるは、乱の機なり」がある。

44 許由が天子の位を辞退したことは、『莊子』逍遙遊篇にみえる。「堯が譲るに天下を以てするも、〔許由〕は受けず。」

45 この句は、『宋書』卷二十七符瑞志上に「舜位にあること十有四年、鍾石・笙箏を奏するに、未だ罷まずして天大いに雷雨あり。…舜乃ち…禹を天に薦め、天子の事を行わしむ」とあるのものともづく。『補』の原文は鐘だが、同音同義の鍾に改めて読む。

46 「洞庭の長者」は、『文選』卷四十四陳琳「檄吳將校部曲文」に、「若し水にして持むべくんば、則ち洞庭に三苗の墟無からん」とある。洞庭で舜に対し反乱を起こした三苗を鎮めたのは禹なので、「洞庭の長者」は禹を指すとわかる。

47 この話は『淮南子』主術訓に見える。「湯の時、七年旱あり。身を以て桑林の際に禱るに、四海の雲湊まり、千里の雨至る。」

48 「鹿臺」は紂の財宝を入れていた倉庫、『史記』卷三股本紀に見える。「〔紂は〕賦税を厚くして鹿臺の錢を實たし、鉅橋の粟を盈たす。…周の武王は是に於いて遂に諸侯を率いて紂を伐つ。…甲子の日、紂は走り入り、鹿臺に登り、其の財宝の衣を衣、火に赴いて死す」

49 この句は『史記』卷四周年紀に「武王は大白旗を持ちて以て諸侯を麾し、…紂の死所に至る。武王自らこれを射て、三たび發して後に車を下り、輕劍を以てこれを撃ち、黃鉞を以て紂の頭を斬り、大白の旗に懸く」とあるのものともづく。「清界」は典拠未詳。あるいは仏教語の「清浄法界」を意味するか。

鉤陳壘上⁵⁰ 武周存す

[八百諸侯を集合させた鉤陳台に 今なお残る周武王の遺跡]

春秋には弔わんと欲す 呉王の石⁵¹

[春秋時代 哀れを極めたのは呉王夫差 洗濯石に名を残す美女西施に
迷い国は滅亡]

戦国には悲哀す筭を磨ぎし人⁵²

[戦国時代 悲しき貞女あり 夫の惨殺を聞き 簪を研いで自死]

燕邦の壯士 衣冠白く⁵³

[燕の国の壯士荆軻を易水に見送る人々は白の死装束]

太子の雄心 天上の紅

[燕の太子丹の雄図は天上に紅に輝く日の如し]

點點たる筑声 微羽換わり⁵⁴

[荆軻の親友高漸離の弾く筑の音はしばしば曲調が変わり]

易水の飛雲 雲は萬層たり

[その時易水の空に浮かぶ雲は無数に重なりあった]

秦を圖らんとするも就らず六國は死し

[秦王暗殺は成功せず 六つの国は滅亡し]

秦を去って⁵⁵ 皇を稱し碣文を刻す⁵⁶

50 「鉤陳壘」については、『水經注』卷五河水に「又た東のかた平縣の北を過ぐ、澧水北従り來たりてこれに注ぐ」とあり、注には「河の南に鉤陳壘有り、世に傳う武王紂を伐ちしとき、八百諸侯の會する處なり」と記されている。

51 「呉王石」とは、『太平御覽』卷四十七に引く孔暉の「會稽記」に「(越王) 勾踐美女を索めて呉王に獻ぜんとし、これを暨羅山の薪を賣るひとの女西施・鄭旦に得、先ず土城山に教習せしむ。山辺に石有り、是れ西施が紗を洗う石なりと云う」とあるように、西施の洗濯石である。

52 『呂氏春秋』卷十四長攻に見える話にもとづく。「襄子 代君に謁してこれに觴めんことを請う。…代君至り、酒酣にして斗を反してこれを撃つこと一成、脳は地を塗る。舞う者兵を操りて以て闘い、尽く其の從者を殺す。因りて代君の車を以て其の妻を迎うに、其の妻遙かにこの状を聞き、筭を磨いで以て自ら刺す」と。

53 秦王（のちの始皇帝）を標的にした刺客荆軻を見送る人々が白装束をまとっていたことは、『史記』卷八十六刺客列傳に、「太子及び賓客の其の事を知る者は、皆白き衣冠にて以てこれを送る」と見える。

54 荆軻の親友高漸離が弾く筑の曲調が変化したことは、前出『史記』刺客列傳のすぐ後の部分に、「高漸離筑を撃ち、荆軻和して歌い、変徴の声を爲すに、士皆涙を垂れて涕泣す。又た前みて曰く、風蕭々として易水寒く、壯士一たび去りて復た還らずと。復た羽声慨慨を爲すに、士皆目を瞋らせ、髮盡く上がりて冠を指す」と見える。

55 「去秦」は『老子』二十九章の「是を以て聖人は甚だしきを去り、奢を去り、秦を去る」にもとづく。「秦」は高慢さ。

[傲慢さをぬぐい去り 皇帝を称してあちこちに石碑を建てた]
 誰か聞く三世の秦皇帝
 [ところがなんと三世皇帝の代に至り]
 人魚の燭盡きて⁵⁷海東昏し
 [始皇帝の地下宮殿を照らしていた人魚の油の灯は消えて 東海は暗闇
 となった]
 佳人 駿馬 歌詩^{いたま}惨しく⁵⁸
 [虞美人と駿馬駝を前にして項羽の歌は悲愴を極め]
 山を抜くこと纔に罷みて秋風に哭す
 [山を引っこ抜くほどの気力もついに挫け秋風に向かって慟哭した]
 心有る四皓⁵⁹は空山に坐し
 [皇太子を救おうと一計を案じた四人の老人は寂しい山中に坐り]
 累い無き張郎は赤松に伴う⁶⁰
 [後顧の憂いのなくなった張良は仙人赤松子に長寿法を教わる]
 真人⁶¹の雲氣は三千丈
 [白水真人即ち後漢の光武帝の体から発する雲氣は三千丈の高さに達し]
 五岳^{いっせい}齊に呼ぶ一萬春⁶²
 [五岳の神々が一齊に皇帝に万歳と呼び掛けた]

56 「刻碣文」は、『史記』卷六秦始皇帝本紀に「二十八年、始皇東のかた郡縣に行き、鄒僕山に上る。石を立て、魯の諸書生と石に刻し秦の徳を頌せんことを議す」とある。

57 「人魚燭」は『史記』卷六秦始皇帝本紀の「始皇帝初めて位に即くや、驪山を穿治す。…水銀を以て百川江河大海を爲し、…人魚の膏を以て燭を爲り、滅びざることこれを久しうせんと度る」に基づく。

58 この句と次の句は『史記』卷七項羽本紀に、死を前にした項羽が虞美人に向かって「力は山を抜き世を蓋う、時利あらず雖逝かず、雖逝かざれば奈何すべき、虞や麋や若を奈何せん」と歌った話にもとづく。

59 漢の高祖劉邦が柔弱な皇太子を廃嫡しようとした時、張良の計略で商山から出てきて皇太子を輔佐した白髪白髯の四人の賢者を指す。

60 この句は、『史記』卷五十五留侯世家に、張良が功成り名遂げた後、引退しようとして言った言葉、「願わくは人間の事を棄て、赤松子に従って遊ばんと欲するのみ。」に基づく。

61 ここの「真人」は「白水真人」と呼ばれた漢の中興の祖・後漢光武帝を指す。『後漢書』卷一下光武帝紀・論に「王莽の位を篡うに及び、劉氏を忌悪み、錢文に金刀有るを以て、故に改めて貨泉と爲す。或いは貨泉の字文を以て白水真人と爲す。後に氣を望む者蘇伯阿、王莽の爲に使いして南陽に至り、春陵郡を望見し、喑いて曰く、氣は佳き哉、鬱々葱々然たり」とある。

62 山岳の神々が皇帝に「萬歳」と呼びかけた事蹟は、『漢書』卷六武帝紀に、「元封元年…親ら嵩高に登る、御史・乘屬、廟旁に在りし吏卒、威な万歳と呼ぶを聞く著三たび」とあり、荀悦の注に「萬歳は山神これを稱うるなり」という。

草は黄^かれ木落つるは先天の數
 [草が枯れ木から葉が落ちるのは自然の摂理]
 董の劍 曹の刀 卯金を斬る⁶³
 [董卓の劍 曹操の刀が 卯金即ち劉氏を斬り殺した]
 粉を傳けし君王六代を傳え⁶⁴
 [白粉つけて化粧した君主たちが南朝六代の国を継承し]
 綵霜 玉露⁶⁵ 氷文⁶⁶を織りなす⁶⁷
 [いろとりどりの霜や輝く露に喩えられる]
 九六⁶⁸の運窮りて天子確^うたれ
 [九六の運氣は尽きて隋の天子煬帝は討ち取られ]
 逼り出す明明たる唐の太宗
 [聖明なる天子唐の太宗李世民の登場となった]
 家庭の事は黒にして人は探り難し
 [帝室の内情は暗く淀み 外部の者には測りがたいが]
 學ぶこと莫かれ詩人⁶⁹が鯉蛉を諷するを
 [詩経の作者が「脊令 原に在り」と風刺した兄弟の不和をまねてはならない]
 只だ昔年烽警⁷⁰の日
 [というのも身内の争いが原因で かつて国が乱れて警報の烽火が上がり]

63 董卓・曹操ともに後漢を滅亡させた豪雄。「卯と金」それに曹操の「刀」を加えると「劉」の字となる。

64 南朝の君主を含めた上流階級がみな化粧をしていたことは、『顔氏家訓』巻三勉学に、「梁朝全盛の時、貴遊の子弟、多くは学術無し。…衣を熏べ面を剃り、粉を傳け朱を施さざる無し」という記述からわかる。

65 「玉露」の用例は、唐の太宗李世民「秋日」二首の一に「菊散りて金風起り、荷疎 玉露圓なり」とある。

66 「氷文」の用例は、唐の呂温「冬夜即時」詩に、「風吹きて雪片は花の落つるに似て、月照りて氷文は鏡の破れるが如し」などがある。

67 ここまでは太古から六朝までの歴史を語った部分である。

68 『周易』乾・初九の「潛龍勿用」に対する賈公彦の疏に言う、「九は老陽と爲し、六は老陰と爲す。故に爻の別名と爲す」。「九六」は老陽老陰で命運窮まり、大きな変革が起こることを示唆する。そこで劉本に従い本文を「九六氣盡天子確」から「九六氣盡天子死」に改める。ここで「天子死す」とは次の「唐の太宗」の直前の天子であるから、隋の煬帝李廣と推定する。

69 「詩人」は『詩経』の歌謡の作者たちを指すが、明刊本「鯉蛉」の二字は『詩経』に見えないので、劉本に従い「脊令」とあらためる。『詩経』小雅・常棣に「脊令 原に在り、兄弟 急難にす、常に良朋有るも、況す永嘆す」とあり、兄弟の不和、ここでは太宗李世民とその兄弟の暗闘を指している。

三月 桃花 玉驄を照らすが爲なり

[三月の桃の花が白い龍馬に映えるころ隋の帝が殺されたからである]
馬前の満月 弓影に臨み⁷¹

[しかし内紛やみがたく 玄武門の変が起こって 馬前には満月のもと
弓の影あり]

天上の連星⁷² 劍に入て紅となる

[天上の二つの星に应ずる 皇太子李建成と太宗の弟李元吉の二人は
刀の錆となった]

赤老⁷³ 玉石⁷⁴を悲しむ心無く

[兵士たちに玄武門の犠牲者たちを悲しむ心などなく]

螭師 湘魂を痛むに管らず⁷⁵

[近衛兵たちに湘水に沈んだ魂を哀悼する気持はない]

一夜 沙嵐 冤魂を葬る

[一夜の砂嵐は成仏しなかった亡者たちを埋葬し]

山谷 年年涙紋を獻じ

[山や谷は毎年死者を悼み 涙の跡を刻んだ]

聲聲 只だ怨む唐の天子

[唐の天子太宗の耳に響く音すべては自分に対する恨み事ばかり]

那んぞ管らん^{かかわ}你^{なんじ}の梅花 上苑⁷⁶に新たなるに⁷⁷

70 「烽警」の用例としては、『舊唐書』卷百十辛雲京傳に、「虜は雲京を畏れ、敢えて息さえず、数年間太原太理は烽警の虞無し」などがある。

71 武徳九年、李世民が兄の皇太子建成と弟の齊王・元吉を殺した事件「玄武門の変」を指す。この句は建成と元吉がそれぞれ李世民と尉遲敬徳に弓で射殺されたことを言い、駱賓王「送鄭少府入遼共賦俠客遠從戎」詩の「満月 弓影に臨み、連星 劍端に入る」をほとんど襲っている。

72 「天上の連星」はおそらく建成・元吉の二人を指す。以下「入劍虹」とあわせ、用例は上記駱賓王の詩参照。これは二人が射殺された後で劍で首を切られ、さらされたことを言う。『資治通鑑』卷百九十一唐紀七・高祖武徳九年の条に、「尉遲敬徳は建成・元吉の首を持ちてこれに示し、宮府の兵遂て潰ゆ」とある。

73 ＊「赤老」は軍人を指す。江休復の『江隣幾雜志』（筆記小説大觀第八冊）に、「都下の鄙俗、軍人を目して赤老と爲す」とある。

74 「玉石」は敵味方を問わず、乱の犠牲者を指すであろう。

75 この句の意味もあいまいである。「螭師」は用例未見だが、「螭」は竜の一種で、皇帝に関するものに冠せられる場合があるので、皇帝の軍隊つまり近衛軍と解した。「湘魂」の用例は、韋莊の「題李斯傳」詩に、「蜀魂湘魂 萬古悲しみ、未だ悲しまず秦相秦に死する時」がある。

76 「上苑」は歴代の皇室御苑。『新唐書』卷百三蘇良嗣傳に「帝は宦者を遣して怪竹を江南に採り、将に上苑に蒔えんとす」とある。＊また、駱賓王「西行別東臺詳正學士」詩に、「上苑 梅花 早く、御溝 楊柳 新たなり」とあるのを留意しよう。

[御苑の梅の花が咲こうが咲くまいがおかまいなしにつづく恨みの声]

さて唐の天子、朝の政務を終え、ただちに酒を召し上がり花を賞
するうちに、ふと眠りにおち、そこへ龍王が夢に現われて叫びま
す、

「天子さま、わが命救いたまえ、わが命救いたまえ」

さらに「泣月」という琵琶の調べで歌い続けた、

宮中の天子慈河動き

[宮中の天子は慈悲の心を動かし]

金牌を傳出し衆臣に告ぐ

[金牌を発令して臣下たちに告げた]

急ぎ斬龍の天の使者を召し

[急いで龍王を斬ることが決まっている天帝の使者魏徴を呼び寄せよ]

白黒の將軍兩り⁷⁸に用心せしむ

[白い將軍秦叔宝と黒い將軍尉遲敬徳の二人に門を警戒させよと]

王言の緯⁷⁹のごときは今顛倒し

[ところが王が口に出した命令は今やひっくり返され]

蝴蝶 飛騰して老龍を殺す⁸⁰

[魏徴は蝴蝶舞う夢の中で老龍王を斬殺した]

龍王 那んぞ肯えて無頭にて過ごさんや

[首を落とされた龍王はどうしてそのまま引き下がれよう]

明月 銀宮 殿門を闢がす

77 ここから弾詞は『記』の時空に入る。竜王が道士と雨が何時に降るかをめぐってカケをし、天帝の命令違反を承知で降雨の時間を少しずらしたために、処刑されることになった。死刑執行人が太宗李世民の重臣魏徴であると聞いた竜王は、ただちに太宗の夢に現われ、命乞いをする。ただし、竜王が太宗の夢に現われたのは夜であり、弾詞のせりふで言うような昼日中ではない。以下65句までは『記』第十回にもとづく。

78 「白黒の將軍」は、李世民麾下の武將秦叔宝・尉遲敬徳を指す。隋末の戦乱や、玄武門の変で活躍した。彼ら二人は後に「門神」として家の守り神となった。おれでは尉遲敬徳が黒く、秦叔宝は白く描かれるので、ここで「白黒の將軍」と描写される。ただし二人の將軍に宮門を守らせるのは、『記』では魏徴が龍王を斬首し、龍王が夜な夜な太宗の夢に現われるようになった後の話である。

79 「王言の緯」は『禮記』緇衣の、「王言は綸の如く、其の出るや緯の如し」に基づく。また「緯」は棺を引く大繩を指す。「王言之緯」は全体を七字に整えるために、「王言」の二文字を延ばしたもので、要するに皇帝の命令の意味である。

80 この句は『莊子』齊物論篇の「昔莊周夢に胡蝶と為る、栩栩然として胡蝶なり」に基づく表現で、魏徴が太宗と囲碁の対局中に居眠りをし、夢の中で竜王を殺したことを指す。

[明月のもと宮殿におしかけ門前で大騒ぎ]
 來朝 龍駒に駕りて出ずるに懶く
 [体の弱った太宗は龍馬に乗っての外出に堪えず]
 宮中の聖主 醫生を拜す
 [聖天子は宮中に臥して御典医を呼び寄せた]
 鬼來りて五日 天王去り
 [龍王の幽鬼がやって来て五日で天子は崩御]
 九地は森森として古人に對す⁸¹
 [ほの暗い九層の地獄で亡者たちに会った]
 弊を作せし陰官は日月を加え⁸²
 [地獄の崔判官がいんちきをやって太宗の寿命を付け加え]
 玉鸞⁸³ 重^{ふた}び響^{はな}きて太だ微明なり
 [御召し馬車についている鈴が再び鳴り響き]
 死生反覆せし唐の皇帝
 [死と生の間を往復した唐の皇帝]
 山川を回り望めば昔日に同じ
 [この世に戻りあたりを振り返れば以前と同じ山と川]
 天王も也た悲しい哉の句を唱う
 「百年 世上 浮蟲に似て
 井下⁸⁴の幽人⁸⁵何れの日にか度されん」と
 [天子は歌った悲しみの詩句、「この世で過ごす百年の生涯も虫の生涯に似て、黄泉の国の恨みに満ちた亡者たちはいつ済度されるのか」]
 便わち請われしは那の玄奘和尚の陳

81 『記』第十一回で、地獄の高祖李淵、兄の建成、弟の元吉らに会い、殺されそうになったことを指す。

82 太宗の卒年は「貞観十三年」であったのを魏徴の知人で冥府の役人となっていた崔判官が「一」の上に棒二本を付け加え、「貞観三十三年」にかえてしまったことを言う。以下68~79句は『記』第十二回の話による。

83 「玉鸞」はすなわち「玉鑾」で、皇帝の車駕につけられた鈴を指す。『楚辭』離騷に、「雲霓の暎藹たるを揚げ、玉鸞の啾啾たるを鳴らす」とある。

84 「井下」はおそらく「泉下」と同じ。『呂氏春秋』本味篇に、「水の美なる者、三危の露、崑崙の井」とあり、高誘の注には、「井、泉なり」とある。

85 「幽人」はもともと隠者を指すが、ここではふさわしくない。杜甫「行次昭陵」詩の「幽人鼎湖に拝す」、この「幽人」は「冤有るもの」と解されているので（吉川幸次郎『杜甫詩注』第二卷二百八十三頁）、それに従う。つまり恨みを抱いて死んで行った冥府の亡者を指すのである。

[そこで招請されたのはかの三蔵法師陳玄奘]

金鐘 玉磬もて迷湖を呼び

[黄金の鐘・玉の磬^{もくぼ}で迷える魂を呼び寄せ]

墨袖 緋旗もて往生を呪^{いの}る

[墨染の袖・黒い旗で往生呪を唱えた]

大士 身を現わし來たりて説法し

[観音菩薩が法要の場に姿を現して説法し]

西方に聖を趕^もむる僧と做^な作る

[三蔵は西方へ仏典を取りに向かう僧となった]

中國の界の前にて僧は馬を走らせ

[中国と西域の国境まで馬を走らせたが]

虎の屋にて傷悲するは天の鑄^{そだ}てたまいし人⁸⁶

[虎の巣窟で従者を食われて悲しみに暮れたのは天が育てた人三蔵]

雙叉嶺の頂きにて梵典を翻^ひき⁸⁷

[双叉嶺の頂上で仏典をひもといて法事を行い]

五行山底にて門生を納^もむ⁸⁸

[五行山のふもとで悟空を弟子にとった]

石澗の黄龍は紫鹿を呑^のみ⁸⁹

[谷川で黄龍が駿馬を人呑みにし]

香林の白壁は紅燐に變^かず⁹⁰

[美麗な森に囲まれた観音院の白壁は三蔵の袈裟をねたんだ老層の悪計で赤い鬼火に包まれた]

風^{あか}は火き眸を吹きて西への路は杳かに

[黄風洞の妖怪が風を悟空の赤い目に吹きかけ西方への道のりはいよいよ遠のいたかと思われたが]

靈吉 飛來して百難空^らし⁹¹

『西遊記』の半分をそっくりここに持って来た手腕は、女媧が石を精錬し、天を補った手腕に匹敵する。

86 『記』十三回において三蔵は双叉嶺で虎の妖怪に従者を食べられてしまう。

87 やはり『記』第十三回、三蔵は救助者たる劉伯欽の家で法事を行った。

88 三蔵法師は五行山下で悟空を弟子にする、『記』第十四回。

89 竜が三蔵の乗馬を食べてしまい、馬に変身して一行に加わる、『記』第十五回。「紫鹿」は駿馬の名で、『藝文類聚』卷五十九陳琳「武軍賦」に、「馬は則ち飛雲・絶景・…紫鹿」とある。

90 袈裟自慢の老僧が三蔵との袈裟競べに負け、なんとかしてそれを手に入れようと三蔵の宿坊に放火した事件、『記』第十五・十六回。

[靈吉菩薩が飛来してすべての難儀は消えうせた]

智猴 占いて睽爻の上を得

[聡明な猿は易占で睽爻の上九を得て]

家を一塗ふたに負うちて老僧を拜せしむ⁹²

[道すがら豚をたたきのめし老僧を師と仰がせた]

流沙 日暮れて千里に嘶き

[夕暮れ時の流沙河に龍馬は千里のかなたに響けとばかりいななき]

雑識 同に歸す淨悟の中⁹³

[悟淨の雑念は淨き悟りに帰着した]

豚魚は終に是れ池中の物⁹⁴

[豚は結局とるに足らぬ池の中の魚同然]

慢りに情箏を把りて曉鐘に代う⁹⁵

[でたためにも情欲の琴と曉の梵鐘を取り換えてしまった]

人參の樹抜かれ哀猿叫び⁹⁶

[五莊觀で悟空は人參果の木を切り倒し途方に暮れて泣き叫び]

白骨夫人 茂林に立つ⁹⁷

[こんもり茂る森にたたずんでいた妖怪は悟空に殺されると白骨に変わった]

金公別れ去りて僧は虎に成り⁹⁸

91 85～86は妖風に目をやられた悟空が靈吉菩薩に目を治してもらう話を指し、『記』第二十・二十一回にある。靈吉菩薩は出自不明であるが、『記』第二十一回末尾に、(小須弥山から飛来した)靈吉菩薩が飛龍宝杖を投げて呪文を唱えると一匹の金龍となって云々とあるので、道教に係する中国産の菩薩ではないかと思われる。

92 87～88は『周易』睽卦の上九が「睽いて孤りなり。豕の塗を負えるを見る。鬼を載すること一車。先にはこれが弧を張り、後にはこれが弧を説す。冠するにあらず婚媾せん」とす。往いて雨に遇えば吉」となっているので、劉本に従い底本の「爻五」を「爻上」に改める。以上から判断して『記』第十七・十八回で、高老莊で入り簪になっていた猪八戒が三蔵の弟子になったことを暗示すると考えられる。

93 89～90は、『記』第二十二回、沙悟淨が流沙河で三蔵に帰依したことを指す。

94 「池中物」は、蜀に入る前の劉備玄德を呉の周瑜が「終に池中物の物に非ず」と評したのにもとづく(『三国志』卷五十四呉書周瑜傳)。

95 91～92は『記』第二十三回で、諸菩薩が一群の美女に化け、三蔵一行の道心を試した時、八戒だけが誘惑に負けてしまったことを指す。

96 『記』第二十四～二十八回、悟空は五莊觀で人參果の樹を切り倒すさわぎを起こし、觀音菩薩にたのんで再生してもらう。

97 『記』第二十七回、悟空が同じ妖怪を何回もうち倒し、それが白骨に変わったため、八戒が三蔵に残虐行為だと讒言し、悟空が追放されてしまう。

[金公すなわち悟空が追放された後、三蔵は黄袍怪により虎に変えられ]

恰好も牛哀^{あつか}⁹⁹ 第二人のごとし

[まさに病のため虎に変わり兄を食べた公牛哀の二の舞となった]

蓮花玉洞にて長夜に懸され¹⁰⁰

[蓮花玉洞で師弟は金角銀角に吊り下げられて長夜を過ごし]

素鹿 山前にて壽星に揖す¹⁰¹

[白鹿は山のふもとで寿老人に悪事をわびた]

唐僧 翻舞す狂風の裏¹⁰²

[三蔵は紅孩児の吹かせた狂風にさらわれ]

御弟 沈淪す黒水の中¹⁰³

[ついで舟もろとも黒水河に沈んでしまった]

道釋は頻りに鬪撃するを須いず¹⁰⁴

[道教と仏教は互いに抗争すべきでなかったのに]

敗血 玄黄 一様に空なり

[悟空に術を破られた怪物は地面に空しく紅の血を流した]

金は金に尅たずして心神阻まれ¹⁰⁵

[金（悟空）は金（金兜山の妖怪）に勝てず心神は分離してしまい]

98 「金公」は悟空を指す。『記』では、悟空は五行の中の金、三蔵は水、八戒は木、悟浄は土に配当されている。95は『記』第二十八～三十一回、悟空の留守に三蔵が黄袍怪につかまり、それがきっかけで黄袍怪に囚われていた宝象国の王女を救出する話。その中で三蔵は宝象国の宮廷で黄袍怪によって虎に変えられてしまう。

99 「牛哀」は姓は公牛名は哀、病気のため虎に変身、自分の兄を食べってしまった。『淮南子』俶真訓に見える。「公牛哀は轉病なり。七日にして化して虎と爲る。其の兄戸を掩して入りこれを覘るに、則ち虎搏ちてこれを殺す」三蔵が虎に変えられたことを公牛哀の話に比擬しているのである。

100 『記』第三十二～三十五回、蓮花洞に住む妖怪金角・銀角につかまえられる話。三蔵一行が蓮花洞につるされたのは、『記』第三十四回。

101 『記』第三十三回～七十九回、比丘国王をたぶらかしていた妖怪を退治してみると、壽老星の乗り物の白鹿であったという話。

102 『記』第四十～四十三回、三蔵は牛魔王の息子紅孩児の巻き起こした狂風にさらわれるが、紅孩児はやがて観音菩薩に捕えられ、その弟子となる。

103 『記』第四十三回、三蔵は亀の妖怪に黒水河に引きこまれる。

104 101～102は、『記』第四十五～四十七回、車遅国で、三人の道士姿の妖怪と術競べをする話。仏・道の争いが収まったあとで、悟空は国王にむかい、「今後は一つの教えだけむやみやたらに信奉することがあってはなりません。どうか儒仏道の一つとみなして、僧も道士も敬い、人材を育成してください。そうすれば国家は安泰となりましょう」と言っており、それを受けている。

105 『記』第五十～五十二回、金公（悟空）が金兜山金兜洞に住む独角兕大王にてござり、金箍棒までとられてしまう。

水は水と相逢いて長老窮まる¹⁰⁶

[水（三蔵）は水（子母河）に出会い、水を飲んだために妊娠し、大いに困惑した]

兩箇の心兒に天地暗く

[二つの心（悟空と六耳獼猴）の闘争のために天地は真っ暗になり]

一雙の猴聖は歡音をも騙す¹⁰⁷

[一對の知恵ザルが観音の目まで騙した]

芭蕉 殺し盡くす山坡の火

[芭蕉扇は火焰山の火を滅ぼしつくし]

綠楊より馬を解き 去りて行き行く¹⁰⁸

[青柳につないだ馬の手綱を解きまた西方に旅立った]

萬鏡樓中 日夜遅く¹⁰⁹

[万鏡楼の中では時間の流れが遅く]

知らず 那れいずの一日か天尊¹¹⁰に見えん

[いつになったらお釈迦さまに会えるのやら]

みこしのはな
隔牆花は歌い終わると琵琶を横たえ、長いため息をつくと、ふわりと

引き下がった。さて悟空は山の窟みで「万鏡楼」の三文字を聞いて、疑惑が生じた、

「万鏡楼のことは昨日起こったばかり、なぜあの娘は知ってるんだ」

悟空は怒りの炎を燃え上がらせ、カッとして、小月王を叩き殺して白黒つけようとまで思いつめた。いかなることになるのか、それは次回のお楽しみ。

[評] 項羽が物語るのは物語の中の物語、これはまた物語の中の弾詞だ。

106 『記』第五十三回で三蔵（五行の水に配当される）と八戒が不思議な川の水を飲んで妊娠してしまうことを指す。

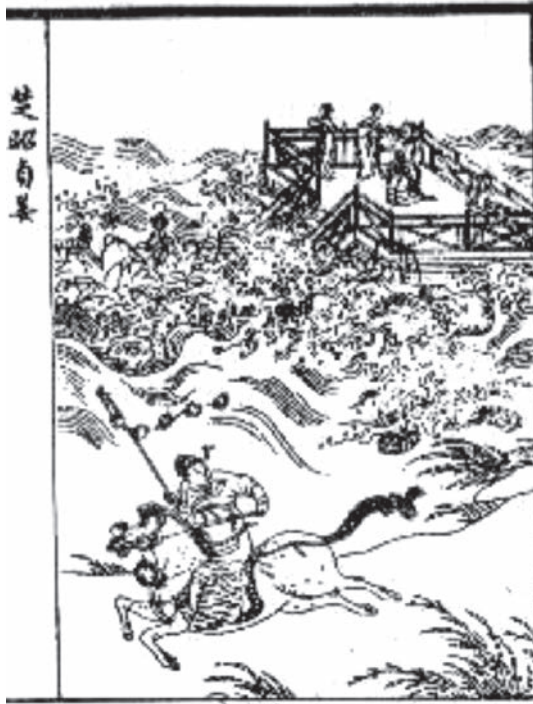
107 106～106は、『記』第五十六～五十八回を指す。花果山水簾洞に住む六耳獼猴は、悟空と同じ姿・能力を持っていた。悟空は苦戦するが、釈迦如来の手助けで、やっと勝つ。

108 107～108は、『記』第五十九～六十一回を指す。三蔵一行の行く手をばば火焰山の火を消そうとした悟空は、牛魔王・羅刹女と戦い、芭蕉扇を奪って火焰山を四十九回あおぎ、雨を降らせて火を消し、難所を通過する。

109 『補』第十六回における次のような問答を参照。三蔵は八戒をどなりつけて黙らせると、悟空に尋ねました、「お前は青々世界で幾日か過ごしたらしいが、こちらじゃなぜ一刻しか時間が経たなかったのか」悟空「心は迷うが、時間は迷いませんから」三蔵「心の方が長いのか、それとも時間の方が長いのか」悟空「心が時間より短い人は仏で、時間が心より短い人は魔物です」。

110 「天尊」は世尊に同じ。仏を指す。『無量壽經』（大正蔵一二卷二六六頁）参照。

補注 『列女傳』 卷四楚昭貞姜の条に載っている「漸臺」の図は以下の通り。



前回の訂正ならびに補注

P232注5：『呉興備志』所引『賈氏説林』の典拠となっているのは元代の伊世珍撰と称する偽書『瑯嬛記』であり記述はあまりあてにならない。荒井健先生指教。

P233注10：伝後唐馮贇撰『雲仙散録』巻一の二十「九和握香」の条に、「叙聞録曰く、郭元振落梅装閣に婢數十人有り、客至らば則ち鴛鴦の裙衫を拖く。一曲終わらば、則ち賜うに糖鷄卵を以てす、其の聲を明らかにするなり。客（一作宴）罷まば、則ち九和握香を散ず」とある。なお『雲仙散録』も偽書の引用が多い書物であると言われている。荒井健先生指教。

P239注33：「仏とは心なり」について。「*」によれば、『湛然圓澄禪師語録』（新文豊版卍大藏經126冊所収）巻八にこの語があるはずなのであるが、そこには無く、実際にはその続きに収められている『湛然禪師宗門或問』に次のようにある。「又佛は心なり。昧心業を造りて果報涯無し」。荒井健先生指教。

- P245注8 : 「孤家」の用例としては、元曲「薛仁貴」第一折に「俺國わがくには箕子封を受けて自り以來、傳わりて孤家に至る」がある。荒井健先生指教。
- P251注7 : 「替身」の用例としては、明代俞汝楨の『禮部志稿』卷一百「移兵部咨文」に、「照得さくりよたり、本部三堂、原もと班頭二名、棍頭二名、轎夫八名有り、積年の宿弊、多くは是れ替身なりと」がある。荒井健先生指教。
- P252注12 : 「火性」の他の用例としては、關漢卿「救風塵」第三折の「則見他惡眼眼摸按着無情棍、便有火性的、不似你個郎君」（恐ろしい形相で情け容赦のない棒を持つあなた、いくら気短な人でも、あなたには負けますわ）がある。荒井健先生指教。
- P257注31 : 「封皮」のより適切な用例としては、『水滸傳』第一回到、「洪太尉看時、另外一所殿宇、一遭都是搗椒紅泥墻、正面兩扇朱槅子、門上使着胳膊大鎖鎖着。交叉上面貼着十數道封皮、封皮上又是重重迭迭使着朱印。檐前一面硃紅漆金字牌額、上書四個金字、寫道伏魔之殿」（洪太尉が見ますと、別棟の拜殿があり、まわりはぐるりと胡椒を塗りこんだ赤い垣根がありました。正面には朱塗りの格子扉が二枚あり、扉は腕ほどの太さの大きな鎖で閉ざされており、その上には十數枚の封印が貼ってあり、封印にはさらにバタバタと朱印が押してあります。ひさしには赤い漆の板に金文字が書かれた額一枚、金の文字で「伏魔之殿」と書かれています）とある。荒井健先生指教。
- P259注36 : 「纏頭」を「纏頭帶」に訂正する。荒井健先生指教。
- P261注46 : 「身數」の用例として挙げた『敦煌變文集』（王重民主編1957年）の「廬山遠公話」は、『敦煌變文校注』（黃徵、張湧泉主編1997年）によると「我今錢數不少」のまちがいのことであり、現在に至るまで「身數」の適切な用例は見つかっていない。荒井健先生指教。
- P263注4 : 「狀詞」のより古い用例としては、孫仲章「勘頭巾」第二折の「雖是個判行的舊狀詞、合幹辦新公事」（すでに処理済みの訴状でも、新たな案件として処理せねばならない）がある。荒井健先生指教。
- P264注8 : 「手本」。同時代の用例としては、明代邱濬の「投筆記」第三十六出の「來者何人、將手本上來。原來是戊己校尉任尚」（来たのは誰じゃ？手本を持ってまいれ。戊己校尉の任尚ではないか！）がある。荒井健先生指教。
- P264注10 : 「十王」。新文豐版『續藏經』第五百十冊『佛說預修十王經』に、「第一秦廣王、第二初江王、第三宋帝王、第四伍官王、第五閻羅王、第六變成王、第七大山王、第八平等王、第九都市王、第十轉輪王」とある。荒井健先生指教。

P266注17：「皂隸」のより早くの用例は、元代馬致遠作「青衫泪」第二折に、「小人是江州一個皂隸。俺白司馬老爹在任、偶感病症、寫了這一封書、教我送與教坊司裴興奴家」（私は江州の下役です。白司馬（白楽天）旦那様は在任中に、病に罹られました。そこで一通の手紙をお書きになり、私に託して教坊司の裴興奴の家にお届けせよとのことでした）とある。荒井健先生指教。

P266注19：「陰陽生」。他の用例としては『金瓶梅』第九十七回に、「陰陽生擇在六月初八日、准娶過門」（陰陽生が占うと、六月八日は日和が良いと出て、興入れはその日に決まりました）があるが、『近代漢語大詞典』（2236頁）によると、「陰陽生」には「公差」「衙役」（ともに役所の下役）の意味があり、ここは占い師、下役、どちらでも意味が通りそうである。荒井健先生指教。

今回も注釈で「※」をつけた箇所は李前程先生の好著『西遊補校注』（崑崙出版社2011年）から補わせて頂いた。厚く感謝申し上げる。